

# 日英協会会報

愛媛日英協会

第 40 号

2018年4月



## 【目 次】

### 【巻頭言】

愛媛日英協会とロンドン愛媛県人会

森田 浩治 ..... 1

### 【随 想】

ビートルズのサクセスストーリーに学ぶ地域資源の販路拡大  
のポイントについて

伊藤 豊 ..... 2

英国留学報告

井久保 浩輝 ..... 3

18 世紀スコットランド挿話

光信 頼子 ..... 6

### 【英国研究】

都市再生に成功したバーミンガム

鈴木茂 ..... 7

イギリスの欧州連合（EU）からの離脱（brexit）交渉の  
現状と問題点

戸澤健次 ..... 9

### 【英国便り】

ロンドン愛媛県人会活動記

井関 武彦 ..... 13

我が子の日本語教育について

烏谷 麻美子 ..... 16

多国籍な英国の病院で働くことで身に付いたある力

小川 大輔 ..... 19

オープンハウス・ロンドン

一夏の終わりに期間限定で新旧の建造物を無料で見学—

藤井 寛 ..... 21

### 【書 棚】

ノーベル文学賞受賞記念公開シンポジウム

井上 保子 ..... 24

「カズオ・イシグロの世界」について

鷲野 博文 ..... 26

カズオ・イシグロ —ジャンル多様性と怒りの深淵！

### 【会員紹介】

正木 友啓 ..... 39

石橋 貞人 ..... 40

### 【追 悼】

榊田三郎氏と麻生俊介氏を偲んで

合田 謙司 ..... 41

### 【事務局報告】

平成 29 年度の事業報告

..... 42



## 【巻頭言】

### 愛媛日英協会とロンドン愛媛県人会

愛媛日英協会

会長 森田 浩治



今年に入り、1月18日に当協会の設立に尽力され初代会長となられた榊田三郎名誉会長、2月20日には麻生俊介元会長のお二人が相次いでご逝去されました。当協会にとりましてはたいへん残念なことでございますが、これまでの当協会の活動へのご理解ご指導に対して改めて感謝申し上げますとともに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

さて、当協会は、1990年（平成2年）の創設以来28年に亘り活動を続けておりますが、この間英国で活動する愛媛県人会と交流する機会がありました。最初は1985年発足の「英国愛媛県人会」との交流ですが、同会は当時英国在住の愛媛県出身者などの情報交換の場になっており、愛媛日英協会も英国旅行などに際して交流の機会がありました。その後1999年以降休止状態となっていましたが、2005年に井関武彦氏が英国留学の際に同窓生など愛媛関連の方々とともに新たに「ロンドン愛媛県人会」として活動を開始され、現在もロンドンで建築家として活躍される傍ら同会の代表として活動を続けられており、愛媛に所縁のある皆さんの交流や懇親の場となっています。当協会では数年前から会報誌にご寄稿いただくなど交流が始まり、昨年夏には井関氏の一時帰国の際に理事会との懇親の機会を得て今後も交流を深めるよう確認したところです。

近年では英国在住の日本人の状況にも変化があるようで、ロンドン愛媛県人会の会員も以前多かった駐在員や学生などから長期滞在者や永住権保持者の割合が増えているそうです。英国で仕事をし、家庭を持って生活し、子供さんを育てておられるという会員の方も多いようで、日英両国の文化や社会、人々の考え方などを理解する世代も今後増えて来るものと思います。

今、英国はEUからの離脱に向かって進んでいます。これは今後の日英関係にとって、EU内のひとつの国から個別の国としての英国との関係が強くなることを示唆しています。今後の両国関係をより深く、より良くするためには、文化や社会、経済等あらゆる面における個人レベルでの相互理解がさらに重要になってきます。

愛媛日英協会とロンドン愛媛県人会の活動や交流がこのような両国間の良好な関係の維持発展の一助となることを心より期待しています。

## 【随 想】

### ビートルズのサクセスストーリーに学ぶ 地域資源の販路拡大のポイントについて

独立行政法人 中小企業基盤整備機構  
四国本部 新市場開拓コーディネーター  
伊 藤 豊



昨年11月、愛媛日英協会のイベント「ビートルズの曲で味わうイギリス文化 vol.2」を愛媛大学大橋学長、愛媛銀行の山下様の HELP! のおかげでなんとか成功裏に終えることができました。この機会をいただいた合田様、ご参加いただいた会員の皆様に厚く感謝申し上げます。



さてこのイベントではビートルズの曲、歌詞の中にあるイギリス文化を解説させていただきましたが、本寄稿では全く別の切り口でビートルズを語らせていただければと思います。

題して

「ビートルズのサクセスストーリーに学ぶ地域資源の販路拡大のポイントについて」

いかに良い新商品を開発しても、その先を見据えた販売プロモーションの戦略がないといわゆる「宝の持ち腐れ」になってしまう恐れがある。よくあるケースとしてまず地域資源ありきのプロダクトア

ウトで開発、商品化したものの、いざ販売する段階になってのマーケティング戦略不在→ターゲットの雲散霧消→商品コンセプト崩壊。結果開発当初の情熱と集中は失われ商品は市場からフェイドアウト、という日本の中小零細企業のポテンシャル、持続力不足が露呈してしまうことがある。

イギリスのリバプールという「地域」で生まれたビートルズという最高のポテンシャルを持った「資源」を20世紀最大のスーパースターにのし上げたのは、ジョージマーティンというビートルズの持つ天賦の才を譜面化アレンジしてレコードの音に具現化できる優れたプロデューサーと、その商品に対する絶対的な目利き力と販路拡大方法に先見の明を持ったブライアンエプスタインというマネージャーの存在に他ならない。

当初ビートルズは大手のレコード会社からは全く相手にされなかった。あのビートルズと契約をしなかった、その大手の絶望的な失敗は当時の閉鎖的なマーケットに迎合して無難な商品しか扱わないという大手の慢心によるもので、音楽という常に新しく刺激的であるべき「情報」「文化」を求めるマーケットの潜在ニーズを把握していなかったがゆえの悲劇である。ビートルズの場合、その才能（曲＝商品）に関しては言を俟たないが、特筆すべきは、リバプールの不良であった彼らにイメージ戦略として特別あつらえのオーダースーツを着せて髪型をそろえ、海を超えたアメリカという巨大なマーケットに販路を見据え、そこでの成功というブランディングによりビートルズの曲を全世界に波及させるというエプスタインの先見性、企画力、推進力である。ちなみに彼はリバプールの小さなレコードショップの店主であった。お客に対面する小売店であったからこそ、マーケットの声をダイレクトにキャッチできたのである。

これらのことから学ぶ販路開拓において必要不可欠な要素は、優れた「マネージャー」の存在だと考える。ジョージマーティンのプロデュース（商品化）に加えてブライアンエプスタインの販路開拓がなければ、最高の「商品」であるビートルズ



でも、もしかしたらリバプールという地方限定の人気バンドで終わっていたかも知れない。

さてビートルズのサクセスストーリーから50余年、現代はインターネットによる情報の即時性とインフラ環境の発達状況は当時とは比較にならない。当時ブライアンエプスタインが担っていた販路開拓の手法は、今後 AI にとって代わられるかもしれない。しかし今も昔もプロデューサーやマネージャーに備わっていなければならない大切な資質は、人間が持つ感性に裏づけされた皮膚感覚の情報租借力、目利き力であることは間違いない。さらに言うならこれからの販路開拓にはプロデューサー、マネージャーの資質に加えて、あらゆる関係先の「人間」との折衝、交通整理に長けたディレクターの役目を一人三役でこなせるマルチな能力を持つ人材が求められていると考える。

まあしかし、なんでもかんでもビートルズに結びつけるものだと自分でも感心しております（笑）



後列左が伊藤豊氏

## 英国留学報告書

松山大学人文学部

英語英米文学科

カンタベリー クライストチャーチ大学

英語学習コース留学

井久保 浩 輝



### 【留学大学】

留学先：英国 ケント州 カンタベリー

クライスト チャーチ大学 英語学習コース

留学期間：2017 年4月 16 日～ 12 月 16 日

### 【授業内容について】

授業は朝の9時から午後3時までであり、朝休憩30分、お昼休憩は1時間です。1時間目の授業は教科書を使って単語、文法を学び、2限目はイギリスの歴史や文学などのトピックを先生が用意してくれます。午後の授業は曜日毎にスピーキング、リーディング、ライティング、リスニングの4技能を集中して学ぶことができ、IELTS（英語運用能力試験）対策クラスも受講することが可能です。私は留学途中にIELTS対策クラスを選択しました。授業では模擬テストの練習をするため、TOEICや英検対策にもなります。クラスは少人数制で、レベル別に分かれています。最初のプレイスメントテスト（筆記・面接）でクラスが決まります。私の受けたテストでは、将来の夢に関する作文と、面接試験では大学生活に関する質疑応答でした。クラスレベルに疑問があればクラス替えについても相談できます。私の場合、最初はUpper intermediateレベルでしたが、授業進行が遅く感じられたため、Advancedレベルのクラスに変更してもらいました。先生は優しく熱心で、ユーモアのある授業のため、楽しみながら英語を学ぶことができ、英語力が上がりました。

### 【生活全般について（衣・食・住等）】

滞在方法として、寮かホームステイを選択できますが、私は8カ月の全留学期間、ずっとホームステイにしました。というのも、英語を話す機会を増やしたい、またイギリス人の生活を体験したいという思いがあったからです。実際にイギリスと日本における家庭生活を通して、生活習慣の違いも体験しながら、ホストマザーとは「家族」と言っても過言ではないほど、仲良くなりました。



ホストファミリーとのスナップ

Catering Level は Bed & Breakfast+ Kitchen を選びました。そのため夕食は、自炊か外食でしたが、私は自炊を中心とし、ホストマザーが夕食を作ってくれることもあったため、節約にもなりました。カンタベリーにはアジアの食材を扱っている店舗もあり、日本食も作ることができます。

ホームステイで夕食付を選んだ友人は、夜7時頃の夕食のために帰宅しなければならなかったため、夜出かけた時は少し不便な様子でした。ホストファミリーによっては、あまり会話をしない、ルールに厳しいといった家庭もあり、さまざまです。留学先のカンタベリー・クライストチャーチ大学では、ホームステイについて、家族構成やペットの有無、家族のように接してくれるファミリーなど、自分の希望を事前に伝えることができます。また、できる限り希望に合った家族を探してくれるため、快適にイギリス生活を楽しむことができるとい

ます。（必ずしも全員が、希望通りの家庭にホームステイできるわけではありませんが。）

### 【休日・余暇の過ごし方】

留学中、ロンドンへは10回以上訪れました。カンタベリー、ロンドン間はバスで約1時間です。ロンドンには観光スポットがたくさんあり、1回の訪問では回り切れません。マーケットも週末に開催されており、お土産や、イギリスの骨董品を買いたい人にはお勧めです。またパブやGlobal Caféといった留学生が集まる場所へも行きました。Global Café は毎週土曜日午後7時から開催され、会話を楽しむだけでなく、イベントや旅行も用意されています。外国の友達を作るのには大変良い機会となりました。



最初のロンドン行

6月には2週間の休暇があります。私は、この間ホストマザーのガーデニングを手伝いながらゆっくり過ごしましたが、この休暇はヨーロッパを周遊できるチャンスです。

### 【この研修で得たもの・学んだもの】

英語力はもちろん、自分に自信がつき、何事にもより積極的に行動するようになりました。イギリスではディベート、プレゼンテーションの機会が多く

ありました。日本では反対意見や、少し異なる発言をすると、周りから批判されることも多々ありますが、イギリスでは反対です。最初は自信がなく、思うように話せませんでした。が、「だまっているより、たとえ間違っているでも何か発言することが大切だ。」とディベートをするたびに学びました。自分は周りと違っていいということに気が付き、自分の思ったことは正直に言い、疑問に思ったことはすぐに聞くようになりました。また、健康にも気を配るようになりました。日本食は体にいいせいか、日本にいる間は健康について一度も考えたことがありませんでしたが、イギリスでは健康に関する話をよく耳にしました。私自身も、イギリス滞在中、揚げ物を採ることが多く、イギリス料理はレパートリーが少ないことに気が付きました。

今回の留学を通じて将来についてさまざまな方向から意識するようになり、健康についても注意するようになりました。

#### 【後輩へのアドバイス・参考になった文献紹介】

留学中には、英語のスピーキングで伸び悩むことがあるかもしれません。しかし、スピーキング力、リスニング力については、私はイギリスにいただけで自然に上がりました。リーディング、ライティングはそうはいきませんので、洋書を読んだり、英語で日記をつけたりする習慣を取り入れると良いと思います。普段から英字新聞や英文記事、洋書などネイティブ向けのものを読んでいると、教科書の英語は簡単に感じるようになり、さらに英語力を伸ばせると思います。また、ライティングも大切です。ライティングはアウトプットの点でスピーキングと似ているため、スピーキング能力の向上にもつながります。新たに覚えた単語や文法をネイティブとの会話の中で実際に使い、正しい使い方なのか、自然な表現かといった確認もできます。継続する力を付けるためにも、日ごろから読書と日記をつけることが効果的です。

#### 【その他】

カンタベリー・クライストチャーチ大学の英語コースには多くの日本人生徒がいます。英語しか話したくないという人にはお勧めしません。私も日本人ばかりという状況をあまり好ましいと感じられず、当初は日本人を避けていましたが、途中から人と人との出会いを大切にしようと思い始めました。日本人は話してみると優しく、おもしろく、国籍や年齢に関係なく話すこと自体が楽しく感じるようになりました。今では、日本全国に友達がいます。また、私は日本語と英語を頭の中で切り替えることの重要性にも気付きました。私はイギリスにいる時、日本語を話した後、英語が話しにくいという点に気付きました。日本人である以上、日本語は話さないといけません。私はこのまま英語しか話さなければ、逆に日本に帰った後、すぐに自分の英語を失うと思い始めました。そのため、ひたすら友達との会話を通して、日本語と英語を話す相手によって交互に使い分ける練習をしました。そうすると、さらに英語力が定着、向上しました。

留学を通して得られるものは、自分の姿勢で変わってきます。この機会に自分だけの留学を体験し、自分なりの成長を遂げてみてはどうでしょうか。



初めてのクリケット体験



## 18 世紀スコットランド挿話

愛媛日英協会会員

光 信 頼 子

ここに一枚の肖像画がある。袖の膨らんだドレスに、タータンチェックの赤い布を肩にまとった年若い女性。彼女の名はフローラ・マクドナルド。1722 年、スコットランドの北西、サウス・ユイスト島ミルトンの土地管理人（タクスマン）の家庭に生まれた。



当時のスコットランドには、名誉革命でフランスに亡命したジェイムズ II 世の一族を王位につかせようとする「ジャコバイト」と呼ばれる人々がいた。彼らは 1715 年、武装蜂起するが成功に至らなかった。しかし 1745 年、今度は孫のチャールズが王位を奪還すべく立ち上がった。美貌の勇敢な王子に共鳴し、兵を挙げるジャコバイト氏族もいたが、他方、英国軍としてジャコバイトから土地を守る任務に就いた族長もいた。フローラの義父は英国軍の長でありながら、実はジャコバイトであった。

チャールズ軍は「カロデンの戦い」で大敗。王子はその後約 2 か月間、アウター・ヘブリディーズの島々で逃亡生活を送る。二十歳そこそこのフローラは図らずも王子に付き添うことになるのだが、その作戦は何と、チャールズをフローラの子に仕立て、サウス・ユイスト島からスカイ島へ逃走させるというものだった。大柄のチャールズの

女装は奇妙であつたらしいが、ともかく王子はスカイ島を経由してスコットランド本土へと逃れ、無事フランスに戻ることができた。ところが逃亡を助けたジャコバイト氏族の村々は、英国軍による執拗な襲撃や略奪を受け、フローラも逮捕され、国事犯としてロンドン塔に監禁される。彼女は処刑を免れスカイ島へと戻るが、その後は経済的困難、アメリカへの移住の失敗など、苦難の人生を送ることとなり、1790 年、波乱の人生を閉じる。



後年フローラは「チャールズ王子を助けた勇気ある女性」として有名になり、スカイ島の墓は観光名所となった。しかし、彼女の「英雄的行為」は、私たちが思うほど単純ではない。当時はフローラを嫉む者や、逮捕された時に関係者の名を挙げたことを恨む者もあり、スカイ島は彼女にとって決して居心地の良い場所ではなかったという。今は観光資源の一つである「ジャコバイトの乱」が、18 世紀スコットランドの人々に残した傷は深い。彼らの心情の複雑さは、現在、独立問題に揺れる彼の国の人々の心の中にも通じるものがあるのではないか。

最後に、スコットランドといえば、エディンバラ城で出会ったボランティアガイドの厳めしい老人を思い出す。彼もかつて兵士であり、第二次世界大戦中、日本軍と大いに戦ったという。

(参考文献)

江藤秀一『十八世紀のスコットランド—ドクター・ジョンソンの旅行記を巡って—』

(開拓社、2008 年)



## 【英国研究】

### 都市再生に成功したバーミンガム

松山大学名誉教授  
経済学博士  
鈴木 茂



日本の地方都市の中心市街地は、大規模な郊外型ショッピングセンターの建設、モータリゼーションの進行、消費者意識の変化等のために衰退し、商店街はシャッター通りとなっている。このため、政府は1998年に中心市街地の活性化を目的としたまちづくり3法（大規模小売店舗立地法、改正都市計画法、中心市街地活性化法）を制定し、各都市は中心市街地の活性化に取り組んできた。しかし、既に20年が経過するが、都市再生に成果を挙げている都市がないといっても過言ではない。何故日本では都市再生の実効性が上がらないのか、筆者の素朴な疑問である。

ロンドンに次ぐイギリス第2の都市、バーミンガム（Birmingham）は、都市再生に成功したまちとしてよく知られている。2004年、NHK「クローズアップ現代」で、世界の多くの都市が衰退し、人口減に直面しているのに対して、バーミンガムは都市再生に成功し、人口が増えていると紹介されたことをご記憶の方もおられると思う。バーミンガムは、かつて「世界の工場」といわれたウェストミッドランズ地域の拠点都市であり、基幹産業は製造業であった。ボイラーを実用に耐えるものに改良してイギリス産業革命に貢献したJ. ワットが、同市の実業家M. ボールトンとパートナーシップを組み、ビジネスに成功したまちである。同市は内陸部に位置したから、輸送コストが相対的に少ない農機具・家具・食器・文具・銃・貴金属等、多種多様な金属加工業が集積した。その頂点に自動車産業が集積し、「ミニ（MINI）」で知られるMGローバーの本社工場が立地していた。イギリスの産業は、第2次大戦後、植民地の独立による排他的市場圏の喪失、生産性向上の遅れ、長期の労働争議、ポンド危機、70年代のオイルショック等に直面して、競争力を失った。バーミン

ガムも例外ではなく、基幹産業である製造業が競争力を喪失し、まちには失業者があふれ、「希望のないまち（hopeless city）」とまで言われた。

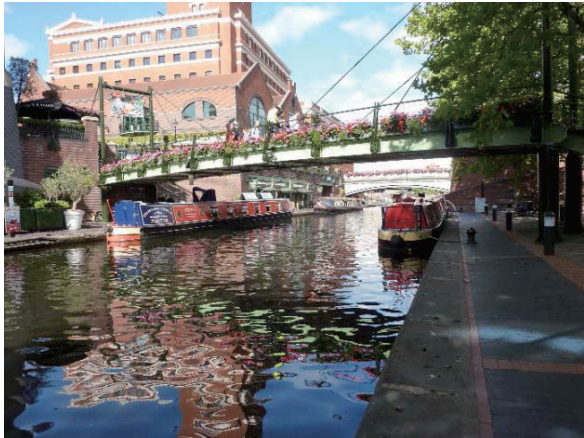


衰退したキャナル（1970年代）

バーミンガムの都市再生事業が本格的に開始されるのは1990年代になってからである。「アーバン・ルネッサンス」をスローガンに都市再生に取り組み、シティーセンターが見事に再生され、市民の都心回帰がみられる。旧来からのシティーセンターと周辺の工場地帯を包括する総合的な都市再生プランを立案し、都市の全面的な改造が行われている。市内に3つあるターミナル駅を改修し、メトロで連結するとともに、都心のキャナルサイトにはレストラン・カフェ、近代的な業務施設、モダンな都心型住宅等が建設され、魅力的な観光スポットに再生されている。



再生されたキャナルサイト



観光スポットとなったキャナルサイト



誘致された専門学校



キャナルサイトのレストラン・カフェ

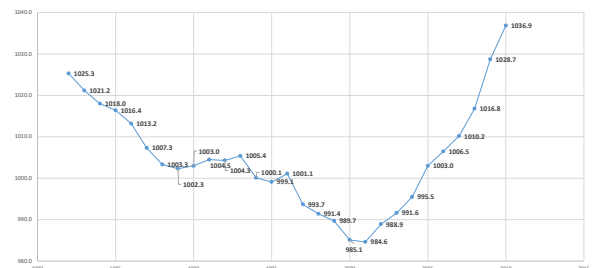
また、バーミンガム交響楽団の活動拠点であるシンホニーホール、国際コンベンションセンター、国際大会開催可能な屋内体育館、水族館、ヨーロッパでも最大規模を誇る市立図書館、専門学校や大学の誘致、博物館が建設され、商業機能と業務機能に特化していた都心を多機能化し（diversity）、住機能、教育文化、アミューズメント、国際交流機能が整備され、観光都市として賑わいを取り戻している。



再生され賑わいを取り戻したシティセンター

さらに、減少傾向にあった市人口は、2001 年の 98 万人を底に増加に転じ、2011 年には 107 万人を超えている。

バーミンガムの人口推移(千人)



バーミンガムの人口推移

都市再生政策について日本がイギリスから学ぶべきことが多い。筆者の実感である。

バーミンガムの位置





## イギリスの欧州連合(EU)からの 離脱(Brexit)交渉の現状と問題点

愛媛大学名誉教授

戸澤健次



はじめに

イギリスがEUを離脱するまでにあと1年となった。拡大を続けてきたEUが初めて主要構成国を失おうとしている。離脱に向けて、現在までどのような交渉が行われてきたのか、またどのような問題があり、どのような結果が導かれようとしているのか、イギリスのEU離脱は世界に大きな影響をもたらさざるを得ず、注視を怠ってはならないであろう。小論ではBrexit交渉の現状と問題点について検討してみたい。

### 1 Brexitを決断したイギリスとEUの思惑

イギリスは、2016年6月23日に行われたEU離脱の可否を問う国民投票で、約52%が離脱支持という僅差で離脱の方針を選んだ。この国民投票に関しては、そもそもする必要がなかったとか、EU残留派の必勝と考えたデーヴィッド・キャメロン首相が判断を誤って強行したとか、いろいろ評されてきた。当時の残留派の思惑と離脱派の要望をまとめると、次のようになろう。

残留派は、EUとの政治的・経済的・社会的関係は極めて緊密であり、自由貿易を享受してきたイギリスは、離脱すれば大きな経済的打撃を受け、国民生活は不安定になると説いた。実際のところ、EU内のイギリスでは移民問題等様々な問題が発生していたが、キャメロン保守党政権はこれらへの解決策よりも離脱によるマイナス面を強調するキャンペーンを展開した。また本来EU支持を表明してきた労働党のジェレミー・コービン党首は、個人的にはEU懐疑派であったこともあり、党

是たるEU残留を説く迫力に欠けていた。

一方、離脱派は、投票直前にボリス・ジョンソンとマイケル・ゴーフという保守党の大物が政権の方針に反する離脱キャンペーンを展開し、一気に勢いづいた。離脱派は、EUの本拠地ブリュッセルの官僚が政治的取り決めの大本から漁獲量まで決定するのは主権の侵害であり、イギリスはかつての栄光ある孤立を思い起こすべきだというジョンソンらの主張に全面的に賛成し、またイギリス独立党のナイジェル・ファラージ党首の説くイギリスのEUへの分担金の過払いとその返却金の社会福祉への転用策を信じ、その結果大方の予想に反し、投票で過半数の支持となった。

他方で、当初EUは、無論のことイギリスのEU残留を願う立場であったが、離脱が決すると、直ちに離脱交渉の準備に入った。EUは、イギリスがシェンゲン協定<sup>1</sup>を尊重し、イギリス在住のEU出身者の人権を守り、またこれまでどおりEUからの自由な移民を受け入れるよう要望した。EUのスタンスは、イギリスが移民とイギリス在住のEU市民の人権を守らず、ブリュッセルでの決め事を守らず、気ままな国家経営をするならば、通商面での特別待遇となる自由貿易は許さないというものであった。いわゆる「ええとこ取り」は許さないという方針を示したと言える。

<sup>1</sup> 1985年にルクセンブルグのシェンゲン近郊でEC5か国(仏、西独、ベネルクス3国)により結ばれ、90年に拡大され、97年のアムステルダム条約でEU法として確認された文書。国境検査を撤廃し、ヒト、モノ、カネの自由な通行を許可するもので、国境を越えて移民が自由に行えるようになった。イギリスとアイルランドは協定の適用外であったが、歴代政府は協定に協力的であり、事実上、国境の壁はないに等しかった。

### 2 Brexit実現までの日程

EUは前身の欧州石炭鉄鋼共同体<sup>2</sup>(ECSC)の時代から拡大発展を続け、最初6か国であった構成国が2016年には28か国に膨らんだにもかかわらず、EUを脱退したい国が出た場合どのような手続きをとるかについては、わずかにリスボ

ン条約第 50 条<sup>3</sup>の規定が法的根拠となっているだけであった。イギリスの離脱が今後も離脱国があるとするればその先例となるものと思われる。第 50 条によると EU からの脱退を望む国家は EU 理事会に文書で正式に申し出なくてはならず、この通告後 2 年以内にすべての脱退後の条件を交渉し、脱退を実現させることができるとある。イギリスは 2017 年 3 月 29 日にテリーザ・メイ首相が EU 理事会に脱退の正式な通告を行ったので、2019 年 3 月 30 日までにすべての離脱後の条件の交渉を終え、離脱しなくてはならない。

<sup>2</sup> ECSC は 1951 年 4 月に仏、西独、イタリア、ベネルクス 3 国の 6 か国で結ばれた石炭と鉄鋼の共同管理運営を行うもので、その後、欧州経済共同体（EEC, 1957 年）、欧州共同体（EC, 1967 年）と拡大発展し、1993 年には 16 か国で欧州連合を発足させた。

<sup>3</sup> リスボン条約は 2007 年 12 月にポルトガルのリスボンで締結され、2009 年 12 月に発効した EU 憲法に代わる条約。第 50 条に離脱に関する規定があるけれども、細部にわたる規定は存在しない。

### 3 Brexit 交渉第一段階

メイ首相は積極的に EU 離脱を説いた人物を EU との交渉の任に充てた。ボリス・ジョンソンを外相に指名し、デーヴィッド・デイビスを EU 離脱交渉担当相とし、直接の交渉責任者に指名した。EU は、前フランス外相のミシェル・バルニエを交渉責任者に任命して交渉に備えた。交渉は毎月 1 回 4 日の日程で行い、会場はブリュッセルの EU 本部とされた。

イギリスにとって、移民問題が内政課題となって自由に制限できるようになるなら、EU との関係の主要な関心は、関税なき貿易・自由貿易を続けることであり、他の EU 構成国と同じ経済的特典を享受することであった。したがって、通商問題と他の規制問題との交渉を同時並行して行うことを望んだ。一方 EU は、離脱して分担金は支出しない、域内の経済問題にも関知しない、そのくせ、域内で享受する経済的利益だけはちゃっかり得ようとするイギリスの「ええとこ取り」を許さない立

場から、通商問題の交渉は、その他の案件で実質的な進展が見られた後にのみ行うと宣言した。そして、中心的通商問題に入る前の交渉を第一段階交渉と定義し、その課題を 3 点に絞った。第一は移民問題であり、第二はイギリスが EU にとどまる間の分担金の負担問題であり、第三は北アイルランド問題であった。

第一の移民問題では、イギリスが EU から離脱する以上、今後の移民の制限は仕方がないけれども、すでにイギリスに在住している EU 市民に対する人権の保障を EU が求め、逆にイギリス側も既に EU 域内に在住する英国国民の人権の保障を求めた。この問題に関しては、ある程度の相互理解と一致が認められた。

第二に、分担金の問題が交渉の課題となった。イギリスと EU の間で、分担金の金額の理解が大きく異なっていただけでなく、ジョンソン外相などはどうせ出ていく EU には一切支払う必要なしと豪語していた。EU は 2017 年 5 月に、イギリスに対して、離脱するまでにイギリスが支払うべき予算に組み込まれた金額が、当初 600 億ユーロ（約 7.8 兆円）であったものを、その後再計算して 1000 億ユーロ（約 13 兆円）に引き上げて請求し、デイビス担当相が一切支払わないと反発して膠着状態となる一幕もあった。この問題に関しては、メイ首相が、2017 年 9 月 22 日にイタリアのフィレンツェで行った演説で一応の決着を図った。首相は、この演説で、イギリスが EU を離脱して平常に戻るまでのいわば激変緩和措置としてある程度の年限を与えてほしいと述べ、この移行期間を 2 年と設定し、その期間と条件を交渉の対象とするよう要請した。そのうえで、その移行期間の支払いも含めて、イギリスは支払うべき分担金を支払うと述べた。

第三の北アイルランド国境問題は、問題点を明確化し、解決を図らねばならない内容を提示するまでで時間切れとなり、具体的な解決は第二段階の交渉にゆだねられた。イギリス交渉チームは、アイルランド政府に離脱後の国境の関税やパ



スポーツの検査を行わないと約束していたという状況を踏まえて、オプションAおよびオプションBを設定した。オプションAは、イギリスがEUとこれまでと変わらない貿易条件を確立し、北アイルランド国境もこれまで通り自由な往來を保証するというものであった。このオプションは、当然ながら今後のBrexit交渉の結果によることになる。次にオプションBは、イギリスは移民の数を制限するけれども、これまでと同様EU諸国に北アイルランド国境を開放し、北アイルランドもこれまで同様国境検査なしの状態を維持するというものであった。つまり、北アイルランド国境のみ例外として開放するというものであった。このオプションBの場合、北アイルランドからブリテン島に入る段階でヒト、モノ、カネにチェックが入ることになり、イギリス政府がその支持を必要としている北アイルランドの民主統一党(DUP)はこのオプションに断固反対を唱えている。この問題に関しては、結論はまだ出ていない。

メイ首相のフィレンツェ演説はEUの大方の指導者の好評を得て、2017年12月、EU首脳はメイ首相と討議し、第一段階での交渉のすべてに結論を得たわけではないけれども、実質的な進展はあったと認めて、2018年初頭から交渉の第二段階に移行することを承認した。第二段階でもまだ本当の主要な交渉課題は俎上に載せていない。つまり、第二段階の交渉では、経過措置期間の長さ、その間の諸条件の設定などが課題とされた。新たに浮上している問題は、激変緩和期間の長さの問題以外に、①漁業者の利権の問題、②ジブラルタルの領有問題、③移行期間中に移動しようとする人々の人権問題などであった。

#### 4 Brexit 交渉第二段階

2018年初頭から第二段階に入り、交渉内容について通商問題の優先順位を上げようとするイギリスと、移行期の設定とその期間の問題に集中しようとするEUの間で交渉はなかなかまとまらない。EUは、3月現在、激変緩和期間の設定に関す

る問題を中心に交渉している。イギリスは、最重要の貿易問題を同時に議論したいが、EU側は頑として受け入れず、諸問題の交渉が片付いた後に通商関連の議論を始めるという方針を貫いている。

経過措置期間に関しては、メイ首相が2年間の希望したのに対して、EUは離脱実施の2019年3月末から21か月、2020年12月末までを移行期間として認めようとしている。イギリス側は、その間に移動する域内外の移民に対する人権は、離脱以前と同じではないと言いつつも、ある程度は認めるとしている。が、どの程度なのか明確にされていない。同様にEU側も、この期間にイギリスからEU域内に移住してくる英国国民の移民に対しては同等の取り扱いをすることになるであろうが、現段階で明瞭ではない。離脱終結の後にはEUからイギリスへの移民は制限されることになる。現存する移民の人権が具体的にどのように守られるかは今後の交渉課題となる。

その他の問題に関する交渉はほとんどすべて現在進行中である。2018年に入って問題化されたものに、ジブラルタル問題がある。イベリア半島の南側に位置するイギリス領ジブラルタルは、スペインに隣接し、イギリスがEU内に属している限り、両国ともにEU構成国家であって利権上の問題は発生しなかったが、イギリスが離脱するなら、交渉課題とすることをスペインが主張し始めた。EU内では、スペインの了承なしにBrexitはジブラルタルに適用しないことになっていた。しかしデビス担当相がジブラルタルもBrexitの対象であると一方的に宣言したことにより、スペインが反発したものであった。移行期間の交渉にとどまらない案件が発生したとみるべきであろう。

漁業権の問題は、交渉内容としては困難な課題ではない。熟練の交渉者であれば、解決案を示すことができるはずである。問題の内容は、漁業者がこれまでと同じく、EUの本部で作成される漁獲量割当を今後2020年12月まで受け入れる

べきかというものである。きっと交渉者たちは、EUから離脱した後の移民の人権が制限されるように、離脱後の漁獲割当制も離脱以前と比べて緩和され、EUとイギリスの間で漁獲量に関する取り決めを行うであろう。

これらの交渉が妥結した後でのみ、イギリスとEUとの主たる交渉案件である通商関係交渉が始まることになる。そのタイムリミットが2019年3月30日であり、交渉は今後さらに激しさを増すものと思われる。

## 5 最重要課題たる通商交渉の収束点

離脱後のイギリスとEUとの貿易の在り方に関しては、すでに何点かの案が検討されている。第一に検討されたのは、ノルウェー方式である。ノルウェーは、EUに加盟せずにEUと広範囲で緩やかな経済協力の協定を結んでほぼ欧州全域で自由貿易を達成している。

第二にノルウェーと類似した立場のスイスの例が検討された。スイスはEUに加盟せず、EUと多国間協定を結ぶこともせず、100か国以上の国と個別に経済協力協定を結び、それらの国々との間に関税障壁および非関税障壁を回避し、自由貿易を享受している。

第三に、EU側の交渉担当者バルニエが最近持ち出したカナダ方式案が検討の対象となっている。バルニエは、現在結ばれているEUとカナダの経済協定が、Brexit後の英・EU関係に最もふさわしいのではないかと提案した。彼によれば、EUに協力金を収めているノルウェーの方式はEUに近すぎ、関税に関して両国で協議するカナダ方式が適切かもしれないとされる。イギリスのデビス交渉担当者もカナダ方式案に傾いているが、さらに自由貿易に近い通商関係を模索したいと述べている。

第四に、EU側は、イギリスがEUと安定的な関係を樹立するまで既成の欧州自由貿易連合(EFTA)<sup>4</sup>に加盟して、その枠組の中でEU

と通商関係を維持するという案も検討している。EFTAは、イギリスが加盟しても5か国の協定にすぎず、EUと比較すれば、関税面での優遇は極めて限定的であるが、貿易推進の上でないよりましということはある。

そして第五に、すべての協議が失敗に終わり、通商交渉が何らの結果も妥結もしない場合、イギリスは世界貿易機関(WTO)のルールに従うことになる。この場合、様々な貿易障壁に直面することになり、自由貿易とはかけ離れた通商関係を維持しなくてはならなくなる。

1年後には否応なくイギリスはいずれかの方針を選択しなくてはならない。実際には、イギリスが離脱後のEUへの協力金負担を否定している以上、ノルウェー方式は自ら拒否していることになり、スイス方式、カナダ方式、EFTA方式のいずれか、あるいは新たに手を加えた方式となることが予想される。

---

<sup>4</sup> 欧州自由貿易連合(European Free Trade Association=EFTA)は、1960年に当時のEECに対抗してイギリスが中心となって7か国で結成された。その後、加盟国がEUに加わったため、2018年の現在、加盟国はノルウェー、スイス、アイスランド、リヒテンシュタインの4か国となっている。

## おわりに

通商交渉が実際に行われる場合、細部にわたって検討が行われるため、多くの年月と交渉者たちの労苦が必要となる。EUから離脱すると決めたなら、さっさと離脱して新たな通商関係の樹立に努力するというわけにはいかない。ただし、離脱交渉が進む中で、日本に限らず、各国は経済や金融のみならず、安全保障など広い分野にわたって対英関係について検討を始めている。とりわけ、金融界や多国籍企業などは敏感に交渉の帰結を察知して対応しようとしている。日本はイギリスが完全に離脱を終えてから新しい通商関係の交渉に入ることになる。日本も少なからずBrexitの影響を受けるが、この影響の検討は別稿で行いたい。

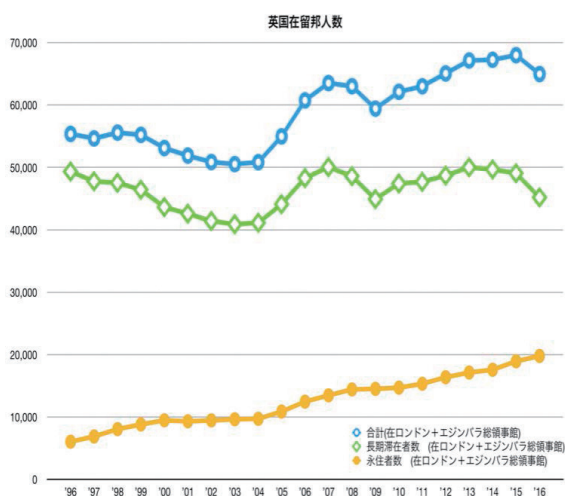
## 【英国便り】

### ロンドン愛媛県人会活動記

ロンドン愛媛県人会

代表 井 関 武 彦

外務省の公式資料である海外在留邦人数調査統計によると、2016年10月時点で英国に滞在する邦人永住者の数は19,786名にのぼるそうです。これは2006年と比較すると約58.7%、また1997年からは約227%も増え、その数はこの20年で3倍以上に膨らんでいます。また、2016年の時点では英国在留邦人のうち30.4%、つまり約3人に一人が永住者として暮らしている事が分かります。



1985年に発足した英国愛媛県人会は、途中8年間の休止期間を経てロンドン愛媛県人会として2005年に再発足し、現在は72名が登録する集まりとなりました。年間不定期に4-5回ほどの懇親会を開催して異国に住む元愛媛県民同士の親交を深めています。昨年の活動記の中で、県人会の会員にイギリス永住者の割合が増え、家族ぐるみの県人会を開催する機会が増えたことについて触れました。2018年の新年会では、約3分の2の参加者が英国永住者であり、冒頭の統計を上回る永住者率であることが分かりました。私

自身も当初は留学生として渡英しましたが、2011年に永住権を取得し、家族とイギリスでの生活を選びました。この国で過ごした13年間で、学生として、就労者として、また家族として、さまざまな視点からロンドンの魅力に触れる機会を得ました。そして、この街の素晴らしい多様性と歴史、寛容な姿勢を実感したことが、永住を決意した一つの理由でもありました。しかしながら、同時にそれはこの国に育つ自分の息子と娘にとって、日本とのつながりが限定されてしまう事でもあります。生活の大半を英語で過ごし、母国語に接する機会は家庭や週末の日本語補習校だけという生活のなかで、子どもがどのように日本の言語や文化を吸収し、日本独自の感性を育んで行くのか。親ならではの疑問、不安に直面することでもありました。



2018年 愛媛県人会新年会  
(筆者は後列の左から3人目)

そんな折に、2017年9月にノーベル文学賞を日系イギリス人のカズオ・イシグロ氏が受賞したというニュースが届きました。映像で拝見したイシグロ氏のインタビューには興味深い点が多くありました。彼は幼少期から、自分の家庭と外の社会の中に日本とイギリスというはっきりと違う二つの文化が並存する事にとっても自覚的だったこと。その2つの文化を日々行き来する中で、周囲の子どもとは違うモノの見方がある事を知り、彼独自の文学的世界観を作り上げたこと、などです。



愛媛県人会には英国で出会った配偶者を連れてこられる方もいれば、お子さんと一緒に参加される方もいらっしゃいます。今回はそのようなご家族の中から、英国で育つ次世代の子ども達に焦点を当て、彼らがイギリスと日本の二つの文化の間でどの様に成長しているのか、その環境が与えた影響についてうかがうことにしました。また、ロンドン日本語補習授業校の教員を33年間務めていらっしゃる金子ひとみ先生からは、海外で日本語を学ぶ子どもたちの様子や、英国で育む日本の感性について、お話を聞きました。



河内さん親子；  
右から順に、母親の河内知子さん、  
娘のめいさんとまりさん

まりさん（22歳）とめいさん（19歳）の姉妹はケンブリッジにお住まいの河内知子さんのお嬢さんで、現在は大学生としてバーミンガムとロンドンで生活しています。これまで、イギリスで育ちながら日本語補習校に通い、また日本の小中学校への体験入学、職場体験や語学研修を通じて積極的に日本の文化を体験されてきました。

バーミンガム大学で医学を専攻するまりさんは、小5から高1まで通ったイギリスの補習校で得た経験について話してくれました。補習校の教科書は、日本語の学習だけでなく戦争や原爆をテーマにした物語も取り上げているので、そこから戦争に対する日本の考え方を学んだといいます。また短歌

や俳句を通じて日本独自の言葉や表現の美しさを学び、日本への理解が深まったとのこと。日本語を外国語として習得するか、国語として学ぶか。これらは大きな違いがあります。日本の子どもたちと同じ教科書を使って日本人教師から学ぶ補習校の国語の授業は、日本語の思考能力が鍛えられるだけでなく、日本の慣習や文化もいっそう伝わります。今でもまりさんは、疲れて帰ってきたときには「やれやれ」と心の中で思ったり、「ぺたぺた」、「べちゃべちゃ」などのオノマトペや「よいしょ」「だらだら」「ひま」などの言葉は、英語よりも日本語で言うほうがしっくり感じる時があるそうです。

妹のめいさんは、現在ギルドホール音楽院でピアノ科を専攻しています。幼い頃から一時帰国の際に日本の保育園、小学校、中学校への体験入学をし、また19歳のとき日本の小学校で職場体験をしたことから、日本とイギリスの教育事情の違いを感じたと言います。例えば、校内の掃除に生徒が参加したり、全校集会で「気をつけ」「礼」の練習を繰り返す様子を見て、学校生活の中にも日本人の清潔さや礼儀正しさの習慣が根付いていることに感銘を受けました。一方、運動会の練習中に厳しく行進の仕方を指導したり、競技の後に勝ったチームに対してばんざいの練習をさせる事など、振舞い方に関する規則が多いことには違和感を覚えたそうです。

日本で育った日本人とご自身との違いについて思うことを聞いたところ、日本の女の子達が自分やイギリス人の友人と比べて声が高く、女の子らしい仕草をする所や、姿勢や身だしなみに気をつけようところという答えが返ってきました。いつもティッシュを持っていたり、かわいいポーチをかばんに入れていたりといった事に、日本の女の子らしさを感じたとのこと。確かに、会話の中にも男言葉と女言葉があるように、日本では日常生活の中で性の違いを意識する機会が多いのかもしれない。



それが個人の仕草や振る舞いにどれほど関係しているかは意見の分かれるところだと思いますが、性差を全く無視して日本語を教える事はできないように、日本文化には古くから、男らしさ、女らしさへの美意識が深く根付いているといえます。

おふたりに共通するのは、複数回にわたる一時帰国で日本各地を訪れ、その自然の美しさに感銘を受けたこと。また、和食を食べたり作ったりしている時に自分が日本人だと実感するというものでした。味覚や食の嗜好は、何にもまして幼い頃から母親の知子さんが作る日本の家庭料理に親しんでこられたせいでしょう。日本の自然を体感することや、日本語を学ぶことと同じように、家庭での食生活も一つの文化を受け継ぐことに大きく貢献していることが分かります。

まりさんは補習校での日本語学習は本当に大変だったと振り返りつつも、イギリスに住みながら二つの文化を理解することで、違う文化や国からの人に対して寛容になったと言います。反対に、イギリスで出会う人のなかには日本に好意的な人もいれば、戦争の歴史や親族の実体験などから日本に偏見や嫌悪感を持つ人もいます。そうした両者の考えを十分に理解出来るからこそその戸惑いと喜びを率直に語ってくれました。

続いて、ロンドン補習授業校で小学3年生の担任をされている金子ひとみ先生には、教育者の視点からイギリスで日本語を学ぶ子どもたちの様子を伝えていただきました。もともと群馬県の小学校で教員をされていた先生は、渡英後の1984年からクロイドン校で国語講師として教鞭をとられています。また、1988年以来、クロイドンにある公文式の学習塾でも現地の子ども達を指導し、長年にわたり日英の初等教育に携わってこられました。

金子先生によると、補習授業校に通う生徒たち

を取り巻く環境はこの30年で大きく変わり、両親のうちの片方が日本人という家庭で育つ子供が学級の大半を占めるようになったということです。ひいては、同じクラスの中でも日本語の習熟度が異なる子どもたちを相手に、授業や家庭学習の方法を根本的に見直さなくてはならず、本当の国語教育とは何かという問いに向き合った結果、全ての子どもたちが自分の考えを自信をもって日本語で伝えられるように、子どもたちの語彙を増やすことを目標にしたのだそうです。子どもたちの実態に合わせて教科書の中にあるポイントとなる言葉に重点を置いて指導したり、宿題も従来のワークシートやプリントのような受動的なものではなく、個人の国語の力を伸ばすよう、自発的に学習を進めて行くノート形式に改良されたようです。一年のまとめとして行なっている「絵本作り」も、子どもたちの興味・関心を大切にし、語彙力を高める効果があると考え、長年続けています。

金子先生は、言葉とその文化には非常に強い結びつきがあるとおっしゃいます。例えば普段私たちが何気なく使っている「安心」「油断」「挨拶」「自然」などは全て仏教から来た言葉ですし、「仁」「徳」「中庸」などの言葉は儒教の精神を引き継いでいます。つまり、現代の我々が使う

日本語の言葉や「和」の概念の中には、先人の考え方や生き方が浸透しており、知らず知らずにその伝統的な背景を持って生活をしています。

そのため、日本語を学ぶということは、国語＝国の言葉を学ぶ事を通して、日本人の感性を培うことにもつながると考えます。

先生はカズオ・イシグロ氏のインタビューをご覧になった際、イシグロ氏のことを在英邦人として大変誇りに思い、嬉しく感じたそうです。と同時に目の前にいる補習校の子ども達には、将来世界に羽ばたく人材になったとき、日本人に向けて日本語でメッセージを伝えられる国際人になって欲しい

と強く思ったそうです。そして、そういう国際人を育てることこそが、イギリスで国語教育に携わっている者の大きな使命だと確信したそうです。

今回は3名の方に英国での日本語教育について体験を語っていただきました。ふたつの文化を学ぶことは、両者の豊かさを身につける喜びでもあり、また時にはその狭間で苦しむことでもあります。河内さん姉妹からは両方の地にしっかり足を下ろし、頼もしく成長されている姿が伝わってきました。母親である知子さんの愛情と努力も、お二人の支えとなったのでしょう。また、金子先生のお話からは、言葉の先にある精神や生き方を教える教育者の信念が伝わってきて、教育や環境が子どもに与える影響がいかに大きいかについて改めて考えさせられました。

イギリスに永住することで出合った、たくましい次世代の姿。彼らに受け継がれる「日本」を確かに感じ、親としても勇気付けられる思いでした。

#### 【井関武彦氏プロフィール】

松山市出身 建築家

高校卒業後、京都大学にて建築学を専攻

ロンドン大学大学院にて

建築学のディプロマ取得

現在、ザハ・ハデイド・

アーキテツ勤務

英国王立建築家協会会員



## 我が子の日本語教育について

烏谷 麻美子

### 1. 息子と最近の私

我家には6歳の息子と1歳の娘がいる。主人がイタリア人の我家では共通言語は英語。最近子供の、特に息子の日本語教育に対して考えることが多い。息子は日本で言う今年4月から新1年生の年齢。そろそろ日本語も本格的に習い始めるところのはずなのだけれど、一向に私に向かって返す言葉は英語が90%。こうなった理由は、生まれた時から私が英語を日本語と交えて常に息子に話していた事が原因だと思う。先にも言ったように、我家の共通語は英語だが、通常3ヶ国語がピュンピュンと飛び交っている毎日。子供にしたらこれだけで会話の混乱の原因は十分だと思う。そこに母親の私が2つの違う言葉で常に話しかける。これを大人の感覚で考える例えにしてみると、美味しいワインを3種類同じ時に出されて結局どれが一番今の食べ物に合っているか分からず、ワインも食事も味わえないという状態だろうか。

これは困った。私の気がつくのが遅すぎた。いや、まだ遅すぎはしないが、これから息子が日本語を学ぶ上で苦勞をするのは予想つく。そしてそれ以上に母親の私も苦勞＝ストレスを感じることは目に見えている。どうして日本語だけを使わなかったのか。私の周りのロンドンに住んでいる日本人の家族の中では子供には適当な年齢になるまで一切英語に触れさせないで、テレビも日本語しか見させない、ということをしているなどの話も聞く。

私の周りの日本人の子供さんたちは、みんなしっかり日本語で自然にお話をしている。もちろん日本語学校にも4月から通わせるのは当たり前。そんな中で私も焦った。なぜ、私の息子だけこんな状態？私のせい？これからでもスパルタで行けば大丈夫だろうか？こんな風に過去に対して後悔をしているネガティブな精神状態だと、ネガティブな気配は

すぐにひゅっと自分に入ってきた。難しいとは思いますが、みんなの通わせている学校に私の息子も入れなければ。息子の将来の目を摘み取ってしまうことになる、と、ここまではさすが思わなかったけれど、このくらいの勢いで考えていたと思う。

他の人の意見を聞きながら自分の意思をしっかりと持つのは何にしても難しいけれど、子育てについては自分のことよりもっと難しいと感じる最近。これは私が今更この場で述べることではないのかもしれないけれども、子供の日本語教育に関しては、ロンドンに来てこれまで何度も決断をする時はあった中で、こんなに人の意見に流されそうになってしまったのは初めてといってもいいくらいに悩んだ。私は私、他人は他人と、これまで大抵は、この考えを基本として生活をして来たロンドン生活であったが、途端に、良く言えば他の人の意見もよく聞くことの大切さを、悪く言えば他の人と一緒になければだめ?と考える数ヶ月を過ごした。

これはやはり私にとって、健康的ではなかったみたいで、外から見ても分かったらしく主人はもちろん、息子にも指摘をされた。

「僕が日本語を話せないときのお母さんは目が怖いからいや!」

と言われ、「あっ」と思った。親が、特に母親がリラックスをしていないと子供がリラックスをしない、というのはまさにこのことと心から反省をした。

どうしてこのようなプレッシャーにならないといけないのか。言語を楽しく学ぶことは大切だと一番自分が分かっているのに。

私が21年前に一人でイギリスに着いた時、マクドナルドで“regular coffee please”と言うのも緊張したのを覚えている。今は何も不自由することなく生活をするのだから自分の息子にもできる、と信じている。別に息子に同じように四苦八苦をさせようと言うのではないが、自分が英語を習得しようとした時は楽しさの方が常に大きく、苦労をしたことは今はあまり覚えていない。もちろん大学

時代に英語論文を書く時に思うように書けず、普通の授業プラス英語も習っていたのは覚えているけれど、それは全て自分が「やりたい」と思ってしたことだった。もちろん息子の今の日本語学環境とは比べることはできないが、そういう息子の環境だからこそもっと彼には面白く興味を持って学んで欲しい。

## 2. 日本語教育への様々な意見

こうやって悩んでいるときにちょうど日本語教育についての他人の意見を聞くチャンスがあり、行ってみた。

そこでは、子供に対して、

- 1) やればできる、ではなくて、やらないとできなくなる。
- 2) 日本語を学ぶ上で、ストレスに感じ、嫌になるのは当たり前、それを超えて成功がある。
- 3) 日本語を喋らないとダメ、喋れない、できないだと落ちこぼれてしまう。

と親を通して伝え、親に対しては、

- 1) 日本語を自然に話すという環境を無理にでも作る。
  - 2) 自然に話すと言う環境を作れないことに関してストレスを感じるのは当たり前。ストレスを超えてこそその成功を目指す。
  - 3) 楽しいだけでは話せない。
- と言っていた。

それらを聞いていた最中はいい気持ちはしなかったけれど、今になって思えばこの機会を与えてくれた方に感謝をしたい、さらにこの意見を聞かなかったら私の日本語教育に対する考えが見えなかったとも思う。

## 3. 我が子への日本語教育の方向

これまで、いろいろ書いてきて、では何が私の日本語教育に対する思いなのか。私なりに色々と考えてみて、整理してみると以下ようになる。

- 1) 自然に話す、という環境ではないのだからそ



れを無理に作ろうとしない。

- 2) その環境がないのならば「楽しく」知りたい、という環境を作る。
- 3) 楽しく知りたい、という環境を作るには何をしたら良いのか、を考える。希望だけでは学べない。それに対しての努力は惜しまない。

この中で、1つだけ上記の意見に少し被るとことはある。

「話したい、という希望だけでは話せない」ということ。これは「楽しいだけでは話せない」という考えと似ている。

当たり前のようだけど、理想だけでは物事は進まないのは子供の日本語教育にしても同じことだ。それでもそこでどれだけポジティブに学ぶのか、を重視した教育にする。実際のところは簡単ではない。90%英語で返してくる息子に一回一回日本語で言い返しをさせていたら、1日は24時間では足りなく、その倍はかかる。

そうであるならその中の半分、いや4分の1だけでも日本語で言い返させたらいいことにしよう、私はそう思うようにした。本が大好きな息子は、自分で読む本は英語ばかり。私が日本語で読んであげるよ、と言っても「こっちがいい」と自分の好きな英語の本を選んでくることの方が多くなってきている。それを無理に「だめ、日本語だけ」と言わずに「1冊日本語の本を読んだら次英語の本」というのもありだと思う。

今、私は日本語学校の選択は、私の周りの日本人のお母様方の行かせるところではなく、20年前に私が大学に入るための英語を習った University of London の Language Centre の日本語コースに息子を入れようと思っている。偶然子供用の日本語コースがそこにあるはけだから、何となく運命的なものを少し感じている。

自分のこの決断が正しいかどうかはわからないけれど、その様に決めた。でも多分間違っていないと思うし、間違っていないでもそれが最後ではない、

と考えることに決めた。

ロンドンにやって来た 19 歳の私には、20 年後に自分の英語ではなく、さらに自分の子供の英語でもなくて、私自身が日本語についてこんなに悩むとは考えられなかった。当たり前のことだけど、人生とは不思議だなあ、と感じる。

20 年後の自分は一体何について悩んでいるのだろうか、やはり言語について悩んでいるのだろうか、ここイギリスでそれを考えているのだろうか。その時、息子とは何語で会話をしているのだろうか。そんな事を思いつつ、今朝も横で聞いていたためちやくちやに聞こえるかもしれない英語交じりの「しりとり」を息子とやり取りしながら、彼を学校に送って行った。

#### 【烏谷麻美子氏プロフィール】

tabi Arts Director

松山市出身。

ロンドンでの学歴は、  
大学

Brunel University (人文学部)  
大学院

University of Westminster  
(視覚文化学専攻)。

2009 年「砥部焼ロンドン展」、2017 年「砥部焼パリ展」の企画・運営。

元大英博物館職員  
(ロンドン在住)





## 多国籍な英国の病院で働くことで 身に付いたある力

ロンドン愛媛県人会 会員  
小 川 大 輔

この寄稿文を書くにあたり、写真を整理していると、懐かしい写真を発見しました。それは英国に来て初めて、英国の看護師としての資格を取るために、老健施設で働いた頃の写真です。今から20年前の出来事です。

私は、愛媛大学の医学部看護学科を一期生として卒業してすぐに渡英し、看護師として働けるように、看護師免許を取得するコースに在籍していました。

当時の夢が、国境なき医師団や NGO などに参加して、災害時やアフリカで働いてみたいという思いがあり、そのために国際免許を取ろうと思い渡英しました。

看護研修中一番驚いたことは、スタッフはイギリス人の白人数が圧倒的に少なく、アフリカからの出稼ぎや、看護師になりたいという若手見習いがとても多いということでした。ロンドンに居る白人は40%弱とも言われ、半分以上が有色人種で占めているという国勢調査の結果は知っていました。ですが、当時の病院は、看護師の給料が非常に低いせいもあり、ここはアフリカか、と思えるほどにアフリカ出身の方々が多くの職種に携わっていました。



18 年前の看護研修中の様子

病院に来る患者さんも様々で、時期によっては不法移民が多かったり、お金がないために、医療が無料である英国に来て治療を受けに来る人もいました。そんな中でも、特に衝撃だったのは、私が子供の頃に歴史の教科書でしか目にしなかった、ホロコースト。それを経験し、命からがら逃げ伸びたユダヤ人の方のための施設があることでした。何かできることはないかなと思って矢先に、たまたまその老健施設の求人があり働く機会に恵まれました。イギリスでは2つだけあり、全ての費用が世界中からの寄付によって成り立ち、約300人の方々が入居している大きな施設でした。

第二次世界大戦のドイツのホロコースト時に、殆どの財産を置いたまま、

命からがらイギリスに逃れてきた人達。彼らのカルテを読めば読むほど、別世界の出来事のように、歴史書を読んでいるような感覚でした。そんな経緯を知っているからか、痴呆の患者さんを見ても、忘れることは、病気で良くないと思われがちですが、辛い経験をしてきた人にとっては、良薬なのかもしれない。これで辛い体験が忘れれば良いな、そんな気持ちにもなりました。顔や手のシワ一つ一つに、厳しさや、辛さや、思いやりや、喜びという歴史が刻まれているような気がしました。

そうした視線で患者さんを見ていると、実は出稼ぎという枠組みで見えてしまっていたアフリカからの人達も、実は、紛争から逃れてきた人であったり、中には女性であっても、額や頬に切り傷があることに気づきました。嫌な過去はあまり人には言いたくないものだということも身を持って知りました。

「なんで、そんな平和な日本に居るのに、こんな所に来たんだ？」何百回も聞かれた質問です。そのたびに理由を説明するのですが、やはり分かってもらえません。「平和で先進国で、クリーンなテクノロジーな国に生まれたのにね。」と怪訝な

顔で不思議そうに言われることが多々ありました。

「確かに、そうですね。」と笑みを浮かべながら答えていましたが、国難で逃げてきた人からすれば、紛争の場所にまた戻るということは、経験した人から言わせれば、正気の沙汰ではないのかもしれない。考えるより経験してこそ、と思っていた当時でしたが、まだ想像力に欠けていた私には、経験しなくても良いことが存在するという意味が、まだ良く分からないままでした。

体験することが何よりも大事という考えもあります。が、体験してからでは遅いという考えも、年を重ねるにつれて実感するようになってきました。ですが、そのためには、今までの経験と何よりもその先を読むことが重要だと気づき始めました。例えば、タバコを吸い続けていたらどうなるかを想像してみることは容易で簡単です。ですが戦争という大きな話になると、それが発展していく過程は想像しづらいものです。でも、こういう場で働くことで、戦争は全くの遠い存在ではなく、身近な身内の中での苛めや虐待の延長上に存在しているように感じます。想像することで、その延長上には経験しなくても良い体験が待っている可能性があるのだと。

イギリスに来てから沢山の人数や宗教の方々と接する上で「想像する」ことが私の中での一つのコミュニケーションのツールとなり、想像=相手の身になって感じてみることで、言葉以上にコミュニケーションできるような気になります。

今は医療の分野から離れ、西洋医療では踏み込めないような心の痛みやケアを主体とする補完療法にシフトを変え、アロマセラピーの学校をロンドンと京都で運営しています。薬を処方するだけでは治らない見えない部分をどう扱い、改善していくかをお伝えしています。それには想像すること、相手の身になってみる大切であることを何よりも重要なことであると生徒さんにお伝えしています。それは私が最初に体感した経験から来るものかもしれません。



### 展示会での様子

ロンドンには愛媛からも沢山の人数の方々が何らかの目的を持って来られています。色んな想いや希望を持ち、お話するたびに、自分が大学を卒業した時の気持ちを振り返る良いきっかけになっています。それは私自身、大学時に思っていた想いを汲んで応援してくれた大学や先生や心温かい愛媛の皆さんとの良い思い出があったからだと思っています。

ここロンドンでまた愛媛の人達とお話できる喜びを楽しみながらも、自分が何故ここに来たのかを振り返るチャンスにもなり、この懇親会をとても楽しみにしております。この会が益々発展し継続されることを今後も期待しております。

### 【小川大輔氏プロフィール】

京都出身

アロマセラピーカンパニーロンドン校・京都校代表  
愛媛大学医学部看護学科卒業後、英国助産師・  
看護師として10年間医療施設で勤務。

その後、自宅で統合医療を主体としたセラピーを行いながら学校を設立。

全て教材をオーガニックで行い、医療の現場でも活躍できるクリニカルアロマセラピストを養成している。



<http://www.thearomatherapycompanykyoto.pw/>

## オープンハウス・ロンドン

－夏の終わりに期間限定で新旧の建造物を無料で  
見学－

日本貿易振興機構(ジェトロ)  
ロンドン事務所  
次長 藤 井 寛  
(前愛媛貿易情報センター所長)



### 【ロンドンのお勧めの場所は?】

皆様は「ロンドンでお勧めの場所は?」と問われれば、どこが思い浮かぶでしょうか。筆者がロンドンを初めて訪れたのは2001年の夏でした。当時、インド・ニューデリーに駐在してから約半年が経っていましたが、インドと歴史的な関係が深い英国に行ってみたいと思い、5日間の夏季休暇の訪問先の1つを英国・ロンドンにしました。ロンドンの滞在期間は2泊3日で、主な訪問先は、バッキンガム宮殿、ロンドン塔、タワーブリッジ、ビッグベン、ハロッズ、ハードロックカフェ、グリニッジおよび某旅行ガイド本に紹介されていたフィッシュ・アンド・チップス店でした。その後、公私ともに英国渡航がありませんでしたが、ロンドン初訪問から約15年後の2016年8月下旬よりロンドンに駐在しています。

2016年8月下旬からの単身赴任後、業務や日用品の買い物以外で外出することがほとんどありませんでしたが(蛇足ですが前回の英国便りは業務の1つである「ビジネス日本語スピーチコンテスト」についてでした)、妻が2017年4月に合流後は、土日祝祭日は一緒に近所の散歩やロンドン中心地の散策、たまに日帰りや短期間の旅行をするようになりました。筆者がオープンハウス・ロンドンを経験するきっかけは、2017年9月初旬、妻から「9月16日(土)にオープンハウス・ロンドンで市庁舎(シティホール)が一般開放されるから行きたい」と言われたことです。

### 【オープンハウス・ロンドンの起源は、 1984年・フランスの「モニュメント オープンドア】

オープンハウス・ロンドンは、1992年から始まりました。主催者のサイトではその目的を「我々は都市を、ロンドンを愛している。また、建築様式、都市設計・計画・社会整備基盤が人々の生活をより良いものとするを信じている」としています<sup>注1</sup>。このことは、通常は入場が制限されているビルや歴史的な建造物を無料で見学できる機会を提供することにより、特にロンドンの居住者が自分たちの周辺の建造物に対する理解や認識を深めるとともに、生活環境の意識や知識の向上を目的にしていると考えられます。2017年のオープンハウス・ロンドンは、9月16日(土)から17日(日)にかけて行われ、約800件の建造物が対象となりました。主催者より、人気トップ25としてザ・ガーキンやザ・シャードなどの高層ビル、セント・ポール大聖堂、セント・パンクラス駅や国会議事堂などの歴史的な建造物が事前に紹介されていました。私たちは、第17位で事前予約が不要なシティホール<sup>注2</sup>を9月17日(土)午前に訪問しました。

因みに、オープンハウス・ロンドンの起源は、1985年10月3日(木)にスペイン・グラナダで開催された「欧州文化遺産の日(European Heritage Days:EHDs)」の前日の10月2日(水)、フランス文化相が欧州評議会・建築遺産担当閣僚会議で、1984年にフランスで開始された「モニュメントオープンドア」を欧州レベルへの拡大に提唱したことです。その後、EHDsはオランダ、ルクセンブルク、マルタ、ベルギー、英国・スコットランドおよびスウェーデンで、今日では50か国で行われています<sup>注3</sup>。

### 【「モダニズムのモーツァルト」による 奇抜な設計、温室効果ガスの排出削減に努力】

シティホールは2002年に完成、テムズ川の南岸、ロンドン橋とタワーブリッジの間に位置しています。シティホールの特徴の1つは、何と言っても奇抜な形状ではないでしょうか。





シティーホールの外観（藤井夫人による撮影。）

この形状は「テムズ河畔に転がるヘルメット」などと言われますが、皆様の印象はいかがでしょうか。シティーホールは「モダニズムのモーツァルト」と評されている世界的に著名な建築家であるノーマン・フォスター卿により設計されました<sup>注4</sup>。シティーホールによれば、建物の球形は同じ容積の立法体より約 25% 表面積が小さく、このことは、冬期は熱が外に逃げることが少なく、反対に夏期は暑くなり過ぎないとしています。全面ガラス張りのため、空調負荷が大きくなり、光熱費も高くなるのではという指摘もあります。一方、シティーホールは、ホームページで環境への配慮を公表しています（以下はそれらの一部を抜粋）。

- ・テムズ川からの距離と傾斜により建物とテムズ川  
の間の歩道が影とならない配慮
- ・太陽光発電パネルの導入
- ・スマートメーターの導入
- ・電圧の最適化
- ・人感センサーの導入
- ・ボイラーの最適化
- ・白熱灯から LED への段階的な変換

シティーホールは、オープンハウス・ロンドンの期間以外は、地下（催事場と喫茶室）1 階（受付）、2 階（回廊）および 3 階（回廊と議事堂）のみが一般に開放されています。シィホール内部の特徴の 1 つは、らせん状で地下から 10 階まで続く傾斜の通路と言えるでしょう。



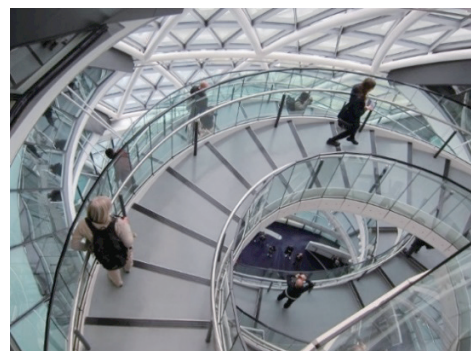
下から見上げたシティーホール内部のらせん階段

最上階までの通路を見ただけでも「おーっ」と思いますが、高い場所からの眺望が好きな方々にとって、オープンハウス・ロンドンの機会のみに開放される最上階のデッキ（10 階、高さ 40 メートル）からの眺めもお勧めです。デッキからは、テムズ川、タワーブリッジ、ロンドン橋、ロンドン塔、ザ・ガーキンなどが見えます。



シティーホールのデッキからの眺め

デッキまではリフトで上がれますが、下りはらせん状の傾斜通路を利用しましょう。時々立ち止まりながら、各階からの内部（執務室や上下のらせん状の傾斜通路）やガラスを通した外の景色を楽しめます。



上層階からシティーホール内の傾斜通路を俯瞰

### 【シティホール近場の観光名所を訪問、偶然の再会】

シティホールを見学後、近くで昼食をとるべくテムズ川沿いの歩道を移動中、偶然、タワーブリッジの道路箇所が上がるのを目撃しました。複数の帆船が通過するためでした。タワーブリッジが完成した当時は1日に50回ほど上がった橋も、現在では多くて週に3回程度ようです。



橋桁が跳ね上がったタワーブリッジ

テムズ川沿いのレストランで昼食後にタワーブリッジ周辺を散策中、突然、パーカーを着用し、ひげを蓄えた男性が筆者に走り寄ってきました。一瞬警戒しましたが、翌週帰任予定のある日本人駐在員であることに気づきました。彼は、約4年余りのロンドン駐在の思い出にタワーブリッジを眺めながら、出張者とビールを飲んでいるとのことでした。前の週に開催された送別会直後の偶然の再会を喜びつつ、今後の再会を改めて約した後、妻と筆者はロンドン塔に行きました。ロンドン塔には、守護神のカラスが飼われているとのことですが、実際に2羽のカラスが大人しく通路沿いの壁にずっと止まっていました。



ロンドン塔のからす

### 【夏の終わりの「風物詩」】

筆者は、2018年3月初旬にこの原稿を執筆しています。今年は1週間前の2月末から1週間ほど、5年振りの大雪や最低気温が氷点下となったこともありましたが、冬至以降、例年どおり日照時間が少しずつ長くなるとともに気候も温暖となり、一部では桜も開花し始めました。これから本格的な春、そして夏の訪れを待ちわびる一方、ロンドンの夏は短く、8月の最終月曜日がサマー・バンクホリデー、10月30日にサマータイムが終了となります。9月以降、ロンドン・デザイン・フェスティバル、ロンドン・レストラン・フェスティバル、クリスマスのイルミネーションなど、日照時間が短くなる中、人々を楽しませるための様々な催しが開催されますが、オープンハウス・ロンドンもこれらのうちのユニークな「風物詩」の1つと言えます。

前述のとおり、有名な建造物の多くは非公開の箇所もありますので、オープンハウス・ロンドンの開催期間に併せた訪問も一考かと思います。2018年のオープンハウス・ロンドンは、9月22日（土）から23（日）に予定されています。

注1：オープンハウス・ロンドン主催者サイト

<https://openhouselondon.org.uk/>

注2：シティホールのサイト

<https://www.london.gov.uk/>

注3：EHDs 主催者サイト

<http://www.europeanheritagedays.com/EHD-Programme/About/History/>

注4：フォスター卿の設計事務所サイト。

フォスター卿は他に前述のザ・ガーキン や北京首都国際空港など、世界各国の文化、商業ビル、交通・教育・研究等の各施設、住宅など幅広い分野の設計を手掛けている。

<https://www.fosterandpartners.com/>



## 【書 棚】

### ノーベル文学賞受賞記念公開シンポジウム 「カズオ・イシグロの世界」について

愛媛日英協会 会員  
井 上 保 子

2018年1月27日、松山大学樋又キャンパスにおいて、ノーベル文学賞受賞記念公開シンポジウム「カズオ・イシグロの世界」が開催された。このシンポジウムは、愛媛日英協会と松山大学大学院言語コミュニケーション研究科との共同主催によって行なわれたものである。パネリストは、松山大学の岡山勇一名誉教授、新井英夫教授と愛媛県立中央高校の鷺野博文教諭で、3氏とも愛媛日英協会会員である。シンポジウムではノーベル賞文学賞についての説明およびカズオ・イシグロとその文学についての解説がなされた。



パネリストの皆さん  
左から、新井先生、岡山先生、鷺野先生

まず、当日の司会進行役でもある新井教授からは、興味深いエピソードを交えたイシグロの経歴が紹介され、続いてイシグロのノーベル文学賞受賞の理由やイシグロの受賞講演の内容について述べられた。新井先生は、イシグロの小説が「世界との結び付きという我々の幻想的な感覚の下にある深淵を明らかにした」というノーベル文学賞

受賞理由を紹介されたあと、文学作品の重要性を説いたイシグロの受賞講演の内容について解説された。世界で分断が深まる中、価値観が揺らいでいる現実には危機感を感じる時代において、よい作品を書きそれを読むことで壁を打ち壊すことができるという講演の骨子を紹介された。続いてイシグロの初期作品である『遠い山なみの光』と『浮世の画家』について、新井先生が吟味された内容の説明があった。日本人が主人公で日本を舞台にしたこれらふたつの小説について、『遠い山なみの光』の主人公のエツコと『浮世の画家』の主人公マスジ・オノが、時代の変動に伴う社会的価値観や環境の変化によってアイデンティティ・クライシスの危機に陥る姿を描いていると分析された。

次に岡山名誉教授による『日の名残り』と『忘れられた巨人』についての発表があった。岡山先生は、『日の名残り』の主人公で英国紳士の主人に仕える執事のステューブンスが、徹底した滅私奉公を堅持したがゆえに、自我に従う生き方ができず、改めて自己の軌跡をたどることで自己を取り戻そうとしていると解説された。さらに、ステューブンスの心の暗い深淵には、ナチの協力者に仕えていたことを認めたくないという気持ちがあり、彼が自己欺瞞に悩んでいる姿は、人が都合の悪い記憶を作り変えてしまうという普遍性を表現していると解明された。また、『忘れられた巨人』については、個人だけでなく共同体にとっても知りたくない真実や知られたくない真実があり、それを小説の中に巧みに活かしていると述べられた。イシグロのそのような傾向は、初期作品では戦争を扱い、『わたしを離さないで』では臓器移植といういずれも社会性の高いテーマを扱うことによって、その背景を描写していることにみられると指摘された。岡山先生は、イシグロがノーベル賞に選ばれた理由について、文学のもつ力を信じ、分断された世界の修復に貢献しようとするイシグロの姿勢が評価されたのではないかと述べられた。



また岡山先生からは、村上春樹はなぜノーベル賞を受賞しなかったのかという、物議を醸す問題提起があった。村上春樹は、ここ数年来受賞を取り沙汰されながら、いまだにそれを果たしていない。岡山先生はまず、ノーベルの遺書に書かれている「文学の領域で理念を持って理想的な方向で最も傑出した作品を創作した作家に文学賞を授与する」という選考基準に言及され、村上作品がこれにのっとっているといえるのかという問いを投げかけられた。村上文学の本質として、類型的な構造と類型的な人物の登場が繰り返され、物語は偶然性によって展開していると分析され、『ねじまき鳥クロニクル』などを例にあげながら説明された。村上春樹とノーベル賞をめぐるマスメディアの過熱ぶりについて、共同通信ロンドン支局取材班による『ノーベル賞の舞台裏』（ちくま新書）では、“ハルキ狂想曲”と表現している。この本の中で、ノーベル賞に詳しい消息筋からの情報として、受賞者を決定するスウェーデン・アカデミーは「村上はあまりに流行作家になり過ぎた」と感じており、選考にあたっては「時流に乗っている旬の作家を敬遠」する傾向があると書かれている。実際のところ、選考委員会の中でどのような評価がされているのか、50年後までその真相は闇の中である。

3人目のパネリストの鷺野教諭は、「カズオ・イシグロ：ジャンルの多様性と怒りの深淵」という表題の発表をされた。鷺野先生は、イシグロのノーベル文学賞受賞理由の中にあった「暗い深淵」とは「怒り」ではないかと述べられた。イシグロ作品の中において、angry だけではなく「怒り」をあらわす言葉が多用されていると指摘され、『充たされざる者』を引き合いにしながら「怒り」について解説された。『充たされざる者』は、ゴシック小説の要素があるなど、多様なジャンルを持ち合わせており、それ以後の作品の方向性を示したという点で大事な位置づけとなるものという前置

きがあった。この小説は、個人と個人の間に横たわる深淵を描いており、分断には苛立ちと不安からくる怒りが作用していると説明された。鷺野先生は、怒りの性質について、その爆発は収束することなく新たな怒りを呼び起こし、怒りはさらに増幅していくという見解を示された。

今回のシンポジウムは、昨年12月に開催されたノーベル賞受賞式の興奮が冷めやらない時期に早くも実施されただけあって、人々の大きな関心を集めたといえる。そのことを証明するかのように、厳しい寒さの中に開催されたにもかかわらず、会場は満員の盛況で終始熱気に包まれていた。3人のパネリストの説明によって、イシグロの作品についてより深い理解を得ることが出来、彼が「世界の平和に貢献する」偉大な作家であることを認識させられたシンポジウムであった。新しい作品が発表されるたびに、読者はそれまでとは違うイシグロの世界に魅了される。今後イシグロが、どのような小説でわたしたちを驚かせてくれるのか、次の作品が待ち望まれる。



会場風景

## カズオ・イシグロ —ジャンルの多様性と怒りの深淵<sup>1</sup>

愛媛日英協会 会員  
松山中央高等学校 教諭  
鷺野博文



### 1. 作品の出版年順による分類とその特徴

2017年のノーベル文学賞をカズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro, 1954-) が受賞した。このことはすでにテレビ、新聞等でも大きく取り上げられ、書店にも彼の作品が並べられているので、恐らく誰もが知っているであろう。彼の来歴については、各種の報道等でも触れられているので、ここでは詳述しない。

カズオ・イシグロは一般に寡作な作家であると言われており、短編を除くと、これまでおおよそ5年程度の間隔で、8作品を世に送り出している。その8作品は、『遠い山なみの光』(*A Pale View of Hills*, 1982)、『浮世の画家』(*An Artist of the Floating World*, 1986)、『日の名残り』(*The Remains of the Day*, 1989)、『充たされざる者』(*The Unconsoled*, 1995)、『わたしたちが孤児だったころ』(*When We Were Orphans*, 2000)、『わたしを離さないで』(*Never Let Me Go*, 2005)、『夜想曲集—音楽と夕暮れをめぐる五つの物語』(*Nocturnes: Five Stories of Music and Nightfall*, 2009、以下『夜想曲集』)、『忘れられた巨人』(*The Buried Giant*, 2015)である。イシグロの作品は、テーマにおいて、お互いに関連性を持っているが、時として作品の設定がそれまでの作風と一変することがある。特にイシグロの作品の長編7作品、短編集1作品を発表された順に読んでいくと、大きく作風が変わるポイントが2つあることに気づく。それは、『充たされざる者』と『忘れられた巨人』である。『充たされざる者』は原書では500ページを、また翻訳では900ページを超える長編小説で、それまでの3

作品より桁外れに多い。『充たされざる者』が発表される前の3作品、つまり、『遠い山なみの光』、『浮世の画家』、『日の名残り』について、バリー・ルイス (Barry Lewis) は次のように指摘している。

イシグロの最初の3作品は類似した領域を扱っている。つまり、ナショナル・アイデンティティーの本質や、重要な歴史的イベントへの個人の関わりや、自分の選んだ職業において優秀であることを認められることの追求であり、外的環境の変化によって人生が狂わされうる可能性である。これらの問題は、過去を受け止めようとする一人称の語り手の苦闘から生ずるものである。それゆえ必然的に、小説はすべて記憶に関わるものとなる。そして、記憶は、まさにその本来の特質として、不確かで、ふれが生じ、消されたり、置き換えられたりされやすい。

Ishiguro's first three novels explore similar territory: the essence of national identity; the relation of the individual to significant historic events; the search for excellence in one's chosen career; the possibility that a life can be wasted through a change in external circumstance. These issues arise out of the struggles of a first-person narrator to come to terms with his or her past. Inevitably, then, the novels are all engaged with memory. And memory, by its very nature, is uncertain, quivering, subject to erasures and displacements. (101)

この中で触れられている「一人称の語り手」という用語は、一般に「信頼できない語り手」とも言われることがある。新井潤美は『日の名残り』の主人公で語り手のスティーブンス (Stevens) についての論考の中で「いわば『全知全能』の語

り手ではない、一つのアジェンダを持つ人物をとおりて語られる物語の『真実』は、その人物にとっての『真実』であるために、『信頼がおけない』ということになる」と指摘している。(161) イシグロの作品は全て「一人称の語り手」による語りであり、この意味では、どの作品も主人公自身の考えに基づき、語っていることと意図的に語っていないこととがある。また、語っていることも脚色や誤解に基づくものも含まれている。これは、全ての作品に共通したことであるが、先ほどのルイスの指摘にあった、戦争を背景とした「ナショナル・アイデンティティー」というテーマでは、『遠い山なみの光』から『日の名残り』までが一貫している。『遠い山なみの光』は作品そのものというよりも、作家イシグロの記憶の中の長崎が舞台となっており、作家自身の「ナショナル・アイデンティティー」と大いに関係がある。また、『遠い山なみの光』に続いて日本が舞台となった『浮世の画家』では、主人公のオノ（Ono）が、また、イギリスが舞台となった『日の名残り』では、スティーブンスが戦争という歴史的な出来事とおして「ナショナル・アイデンティティー」について考えざるをえない立場に追い込まれている。また、特にこの2作品は自身の職業への思いの変化という点でもテーマが一貫している。

一方『充たされざる者』では、戦争は背景として描かれておらず、加えて「ナショナル・アイデンティティー」とは無関係である。主人公の記憶は、それまでの作品よりもより曖昧さが増しており、作品全体が夢の中の出来事であるかのような印象を受ける。物語の冒頭、主人公のライダー（Ryder）はホテルに到着後、ポーターのグスタフ（Gustav）の案内で部屋までエレベーターで上がっていく。そのとき、グスタフは、自らがポーターという職にいかに関心を持っているか、また、その地域のポーターの地位向上にいかに関与してきたかについて、『日の名残り』のスティーブンスばりに、エレベーターに乗ってから、原書では6ページ分

に渡って、延々と語る。常識的に考えれば、6ページ分の内容を語っても目的階にいつか到着しないエレベーターなどあるのだろうかと思うが、作品中では、ライダーもグスタフもそのようなことは全く考えもしない。グスタフは長話の最後にライダーが滞在中、スケジュールの管理や種々の手配をする担当になっているヒルデ・シュトラットマン（Miss Hilde Stratmann）に触れる。それを聞いてのライダーの反応は次のようなものになっている。<sup>2</sup>

「すまないが、さっきから話に出てくるミス・ヒルデとは、誰なんですか？」

そう言い終わるや、ポーターがわたしの肩越しに後ろの方を見つめているのに気がついた。振り返ってみると、驚いたことにこのエレベーターに乗っていたのは、わたしたち2人だけではなかった。きりりとしたビジネススーツを着こなした小柄な若い女性が、わたしの後方のエレベーターの隅に体を押し込めるようにして立っていたのだ。わたしがやっと彼女に気づいたのが分かったと、彼女はほほ笑んで一歩前に足を踏み出した。(21)

“Pardon me,” I said, “but who is this Miss Hilde you keep referring to?”

No sooner had I said this, I noticed that the porter was gazing past my shoulder at some spot behind me. Turning, I saw with a start that we were not alone in the elevator. A small young woman in a neat business suit was standing pressed into the corner behind me. Perceiving that I had at last noticed her, she smiled and took a step forward. (9)

この短い引用の中に2カ所も「気づく」（“notice”）という言葉が出る。一般的にはそれほど広くないエレベーターで、全員で3人しかいないのに、気づかないということがあるだろうか。



これらの非論理的な描写についてヴォイチェク・ドロネク (Wojciech Drag) は、「この最初の場面は『充たされざる者』への入り口のとして読むことができる。それは、たくさんの現実とは相容れない法則や、ライダーの語りを持つ虚構の世界を定義する部分を導入している。最初の数ページで、読者は夢のロジックに支配された現実へと入り込んだことに気づき始めるだろう」(“The first scene can be read as a gateway into the reality of *The Unconsoled*. It introduces a number of peculiar laws and facets that define the fictional realm of Ryder’s narrative. Several pages into the opening scene, the reader begins to realise that they have entered a reality governed by the logic of a dream.”)と指摘している。(108)

『充たされざる者』以前の3作品と比較すれば、夢の要素がそれまでの作品よりも増えていることが分かる。このことから、『充たされざる者』で大きな作風の変化があったと言うことができる。

一人称の語りの中に夢の要素を導入するという技法は、次作の『わたしたちが孤児だったころ』や『夜想曲集』の特に第4話、そして『わたしを離さないで』にも見られる。『わたしたちが孤児だったころ』では、租界の外の戦闘地帯で主人公のクリストファー・バンクス (Christopher Banks) が、けがをした日本兵に出会い、一緒にその危険地帯を進んでいく。バンクスはその日本兵が子供時代に隣に住んでおり、よく遊んでいたアキラ (Akira) だと直感的に確信している。彼らは最終的に日本軍の司令部に保護される。このとき、バンクスは応対した大佐に、その日本兵に以前、会ったことがあるのかと聞かれて、「彼のことを幼友達だと思っていました。でも、今になるとよくわからないのです。今ではいろんなことが、自分の思っていたようなものではないと考えはじめています」(467) (“I thought he was a friend of mine from my childhood. But now, I’m not so certain. I’m beginning to see now, many things

aren’t as I supposed.” (277))と答えている。死体に遭遇する場面、間一髪で銃弾をかわす場面、姿は見えないが死を迎えつつある者の悲鳴など、あらゆる描写が悪夢のものと言えるが、バンクスのこの言葉からは、記憶すらも夢の一部になろうとしていることがわかる。

このような非現実的な要素は『夜想曲集』の第4話で、整形手術後の包帯のせいで、お互いに顔もよく分からないままホテルの中を探検することになるスティーブ (Steve) とリンディ・ガードナー (Lindy Gardner) の描写にも取り入れられているが、こちらの方は、コミカルなタッチとなっている。また、『わたしを離さないで』については、1990年代後半のイギリスが舞台となっており、現在から見れば過去の話だが、物語の世界では、クローン人間が自らの体を、クローンではない人間に臓器提供することが常識となった、いわば悪夢の世界である。

それでも、ルイスが特に『充たされざる者』を取り上げて、次のように指摘しているように、これらの作品は決してファンタジーではない。

スウィフトやルイス・キャロル、カフカの影響は認められても、『充たされざる者』はファンタジーのようなものではない。その世界は法則がないのではなく、むしろ一連の語られることのない気まぐれに支配されているのである。ライダーは確かに、結婚していることを忘れていたり、ガウン姿でホテルのフロントに現われたとしても、彼は決して体の大きさを変えたり、時計を持った白ウサギに会ったりすることはないのだ。恐らく、この小説はもっと異なったジャンルに分類されるべきである。

Despite the influence of Swift, Carroll and Kafka, *The Unconsoled* doesn’t feel like a fantasy. Its world is not without rules, but rather is governed by an unspoken set

of quirks. Ryder may well forget that he is married or turn up at a reception in his dressing gown, but here is never a possibility that he will change size or meet white rabbits with watches. Perhaps, then, the novel should be classified in a different way. (125)

確かに、『わたしを離さないで』ではクローン人間という現実には実在しないものが語り手として登場するが、それは等身大の人間であり、魔法が使えるわけでもなく、また、動物や想像上の生き物でもない。しかしながら、続く『忘れられた巨人』は、アーサー王伝説に着想を得たファンタジー小説の体裁を取っており、人々が記憶をなくしているのはクエリグ(Querig)という竜が原因である。もはやこの小説についてファンタジーの影響がないとは言えない。したがって、作風が大きく変わるポイントとしては、この『忘れられた巨人』が2つ目ということになる。

作風の変化という点では『夜想曲集』をあげてもよいという意見もあるかもしれない。しかし、これは長編ではなく5つの短編集となっている点を除けば、音楽に対する考え方の相違や、その相違に基づく、夫婦間の不和など、『充たされざる者』のテーマと類似性がある。また、第1話で登場したリンディ・ガードナーを第4話で再度登場させて関連性を持たせるなど、必然性があるわけではないが物語の連続性も意識されている。作風の大きな変化という観点では、『夜想曲集』を除外してよい。

これらのことから『日の名残り』までの3作品を前期、『充たされざる者』から『夜想曲集』までを中期、そして、今後発表されるであろう作品を期待しながら『忘れられた巨人』以降を後期と位置づけて、以下では、特に中期作品を取り上げ、イシグロ作品の特徴とも言うべき、ジャンルの多様性について論じたい。

## 2. ジャンルの多様性

『充たされざる者』は4つのパートから成る。その第1部、まさに作品の冒頭で、ライダーが到着したホテルの様子は次のように描写されている。

ロビーはかなり広々としていて、まわりにはコーヒー・テーブルがゆったりとした間隔で置いてある。しかし天井は低く、はっきりと垂れ下がった部分があって、閉所恐怖症になりそうな雰囲気だ。外は晴天だというのに、ホテルのなかは薄暗い。フロントデスクのそばの壁に一筋だけ明るい光が差しこみ、黒っぽい羽目板と、ドイツ語、フランス語、英語の雑誌をのせた棚のあたりを照らしている。(9)

The lobby was reasonably spacious, allowing several coffee tables to be spread around it with no sense of crowding. But the ceiling was low and had a definite sag, creating a slightly claustrophobic mood, and despite the sunshine outside the light was gloomy. Only near the reception desk was there a bright streak of sun on the wall, illuminating an area of dark wood panelling and a rack of magazines in German, French and English. (3)

このようなホテルの描写で物語が始まることで、最初から物語全体の雰囲気を暗いものにしており、先行きの不透明感を醸し出している。また、第1部の最後は、「木曜の夕べ」(“Thursday night”)という催しを前に、指揮者であるブロッスキー(Brodsky)を主賓に招いてきた最後の晩餐会の様子が描かれている。ホテルの支配人ホフマン(Hoffman)の運転でホテルから連れてこられたこの晩餐会の会場となる屋敷については、次のように描写されている。

しばらくすると車は広い道路を離れ、落ち着いた住宅地を走っていた。暗闇のなかに大きな家屋敷が見え、その多くは高い塀か生け垣に囲まれている。ホフマンは木立の生い茂った通りを慎重に運転していく。(中略)

わたしたちは高くそびえる鉄の門を通して、堂々とした屋敷の中庭へ入った。すでにたくさんの車がとまっていて、ホフマンが駐車スペースを探すのに少し時間がかかった。(中略)

わたしはちょっと座席に残って、これから出席する催しの手がかりはないかと、大きな屋敷を偵察した。正面には、ほとんど地面まで届く巨大な窓がずらりと並んでいる。その大半はカーテンの向こうに明かりがついていたが、なかで何が行われているかは見えなかった。(221)

After a while we turned off the open road and found ourselves in a salubrious residential district. I could see in the darkness large houses in their own grounds, often surrounded by high walls or hedges. Hoffman drove carefully around the leafy avenues, . . .

We passed through some tall iron gates into the courtyard of a substantial residence. There were already many vehicles parked around the grounds and it took the hotel manager a little while to find a space. . . .

I remained in my seat a moment longer, studying the large house for clues concerning the occasion we were about to attend. The front comprised a long row of huge windows coming almost to the ground. Most of these were lit behind their curtains, but I could see nothing of what was going on within. (123-24)

後になって、結局ここがホテルに隣接するアトリウムと呼ばれる別館だったことが分かるのだが、このような建物の描写は、ゴシック小説の伝統を彷彿とさせる。阿部陽子は、エミリー・ブロンテ (Emily Brontë) の『嵐が丘』 (*Wuthering Heights*, 1847) におけるゴシック小説の特徴を分析した批評の中で、次のように述べている。

ゴシック小説とは起源は建築のゴシック式建築からきていて、荘厳な教会の建物から派生して、一つの建物、あるいは一つの空間の中で起こる話である。気味の悪い、幻想的な超自然的な話で、幽霊が出る城や、遺跡、原始的な風景の中で起こる。ゴシック小説には悪者 (villan) がいて、その人は建物の主人で自分以外の人を苦しめ、時には暴力をふるう。ゴシック小説の家の長、つまり悪者は一つの建物を自分の意のままにし、そこに住む人々も自分に従わせる。元々ゴシック建築が中世の教会のことで、ゴシック建築の教会の時代の中世は人々が病気や飢饉などの恐れの中で信仰を持っていたので、ゴシックは恐怖で人を中心に向かわせるあり方である。ゴシック小説の支配者である悪者も城や屋敷の中の者を恐怖に陥れて操る。(167)

このようなゴシック小説の定義を踏まえるならば、ゴシック建築を思わせるホテルや宴会場の様子から、『充たされざる者』には、ブロンテの『嵐が丘』の作風に共通する部分があることは確かである。

また、『充たされざる者』には、心理写実主義と評され、『高慢と偏見』 (*Pride and Prejudice*, 1813) で知られたジェーン・オースティン (Jane Austen) の影響も見ることができる。『高慢と偏見』はイギリスの片田舎の閉鎖的な環境の中で、当時の女性の結婚と、誤解と偏見から生じる恋愛模様を描いている。この小説の特徴の一つは、



全ての登場人物を、舞踏会など、現在の日本で言えば婚活パーティーに一度に登場させるという手法を取っているところである。『充たされざる者』の第1部の晩餐会では、概ね物語の本筋にとって主要な人物が一度に集合しており、オースティンの手法に類似している。

さらに、先に引用したルイスも触れていることだが、『充たされざる者』にはカフカ (Franz Kafka) の『審判』 (*Der Proceß*, 1927) の影響も見られる。この作品では、主人公のヨーゼフ・K (Josef K.) が理由も分からないまま逮捕される。審理の通告が曖昧なため目的地までなかなか到着できず、しかも審理の場所が古いアパートの一室であったりするなど、物事の展開に必然性がない。そして裁判らしい裁判もないまま処刑人によって処刑される。『充たされざる者』のライダーの身の上に次々に起こる困難な課題もライダーにとっては不条理なものであり、カフカの作品との類似性を指摘することができる。

さらに、『充たされざる者』にはブルースト (Valentin Louis Georges Eugène Marcel Proust) の影響も見られる。代表作の『失われた時を求めて』 (*À la recherche du temps perdu*, 1913-27) では、匂いなどの感覚的刺激が過去の記憶と結びつき、その当時のことを思い出すという、いわゆる無意識的記憶にしたがって物語が展開してゆく。2015年6月5日に慶應義塾大学三田キャンパスで行われたイシグロ本人へのオープン・インタビューの中で、イシグロは、自分自身がブルーストの大ファンというわけではないとしながらも、最初の作品を書き上げた頃にブルーストの作品を読んだとした上で、次のように述べている。

つまり、最近起こったばかりのことを扱っているシーンのまさにすぐ横に何年も前に起こったことを伝えるシーンを置いているわけです。その時、私は、ブルーストの自由を、このように動き回る自由というものを知ったのです。物

語を直線的に展開していくということに彼は閉じ込められていなかった。彼はプロットというものに閉じ込められていなかったわけです。それはほとんど抽象絵画のようでした。あるいは芸術家がコラージュという方法を使うのに似ていました。キャンバスのここにこういったさまざまなものを置いて、そこにはこの色を置くとか。これは記憶だけではなくて、語り手の内面の考えを使って書く、素晴らしく自由な方法だと私は思ったのです。(178)

ここに述べられた「動き回る自由」は前期の3作品と比べても『充たされざる者』では、その振幅が大きくなっている。子供時代の記憶から現在に至るまで、ほとんど忘れ去られていた記憶の断片が、行く先々で時期を定めず思い出されている。

イシグロ自身はこの小説について、柴田元幸とのインタビューの中で、次のように語っている。

自分でも惹かれたんです、一つの精神がだんだん、今おっしゃった悪夢の状態に落ちていくのを描くということに。『充たされざる者』は、不思議な夢のような世界からはじまります。悪夢そのものではないけれど、悪夢の一步手前のような世界からはじまり、ずっとそこにとどまります。でも今度は、その変化のプロセスを、段階を追って見せたらもっと面白いだろうと思ったんです。文芸批評的に言えば、作品に深く入っていくにつれて、すこしずつ違う技巧を使ってみようというわけです。

It did actually interest me to actually show a mind sliding further and further into what you might call the nightmare. *The Unconsoled*, you know, starts in the strange kind of dream—something on the edge of nightmare, not quite nightmare—and stays there. But I thought it would be interesting

to show the process going in stages, which I suppose means in terms of—in literary terms, using slightly different techniques as you go along, as you go further into the book. (216-17)

このイシグロの主張を考慮すると、『充たされざる者』では作品に深く入ると違う技巧が少しずつ入ってくるのだから、読者が文学の様々な手法やジャンルが一体化されているという感覚を持っても不思議はない。その一体化のさせ方が、イシグロ独自のものであり、イシグロ特有の世界観を作り上げていると言える。

この作品に続く『わたしたちが孤児だったころ』には、推理小説の手法が使われている。主人公のバンクスの職業は探偵という設定である。ユージン・テオ (Yugin Teo) は、作品で事件が起こる時代設定が 1920 年代から 30 年代となっているのは、アガサ・クリスティー (Agatha Christie) やドロシー・セイヤーズ (Dorothy Sayers) が活躍した「イギリス探偵小説の『黄金時代』」(‘the “Golden Age” of English detective fiction’) に重ねているというイシグロ自身の主張を踏まえた上で、バンクスが学校時代に贈られた拡大鏡に刻まれた製作年の 1887 年は、まさに最初のシャーロック・ホームズ (Sherlock Holmes) の物語が発表された年であることを指摘している。(88) さらに、テオは次のように述べている。

イシグロは彼が興味を持った様々なテーマを探ろうと、彼の小説にメタファーの枠組みを与えてくれるような文学の形式を絶えず当てはめてみようとする作家である。『わたしたちが孤児だったころ』の場合、イシグロは悪という問題に人々がどう対処するかということに真剣に取り組んでいる。

Ishiguro is a writer who constantly

appropriates literary forms to provide a metaphorical framework for his novels so that he may explore the various themes that are of interest to him. In the case of *When We Were Orphans*, Ishiguro is keen to investigate the way people deal with the concept of evil. (88-89)

ここには、推理小説という一つのジャンルを用いるだけでなく、その推理小説が全盛期だった当時の時代思潮や社会背景を踏まえつつ、悪とは何かという問題を扱っていることが指摘されている。バンクスは、養子縁組で孤児となっていた女の子を引き取るにも関わらず、その女の子を置いて、イギリスから、幼少期を過ごした香港へと渡っている。その理由は、行方不明となった両親を探すことでもあるが、はびこる悪に立ち向かうためでもあった。しかし、作中でその悪が何なのかは明確には述べられていない。仮に戦争やアヘンの密貿易が悪だとしても、また、上海に住むイギリス人の考え方や態度が悪だとしても、バンクス一人の力でどうにかなるものではない。結局のところ、読者はその悪が何であるのか、想像するしかない。さらに言えば、悪とは何なのかを読者に考えさせるという点で、単なる推理小説の枠を超えている。このことからイシグロにとって文学のジャンルは、自らの主張を伝えるための一手段でしかないことが分かる。

『わたしを離さないで』では、SF 小説の手法が使われている。イシグロはこの作品でクローンを扱ったことについて、大野和基とのインタビューの中で、「魂とは何か。このコンピュータには魂があるか。こういう仕掛けは、サイエンス・フィクションから来たものとも言えますが、私のような小説家が、文学の中でずっと昔から投げかけられてきた古くからある問いに戻ることに役に立つのです」と述べた上で、次のように続けている。

人はどれほど自分のことについて消極的か、そういうことに私は興味をそそられます。自分の仕事、地位を人は受け入れているのです。そこから脱出しようとしません。実際のところ、自分たちの小さな仕事をうまくやり遂げたり、小さな役割を非常にうまく果たしたりすることで、尊厳を得ようとします。時にはこれはとても悲しく、悲劇的になることがあります。(134)

ここからも、イシグロはSFというジャンルを自らのテーマ、この作品では自らの立場の受容というテーマを分かりやすく伝えるための一つの装置として利用していることが分かる。

これまで見てきたように、イシグロの作品には、文学の歴史の中で確立されてきた様々なジャンルの影響を見ることができる。イシグロとジャンル小説との関係について、大森望は「要は、『小説にドラゴン（とかクローンとか名探偵とか）を出しただけでシリアスな文学じゃないと思われるのは困るよね』という話。（中略）カズオ・イシグロ自身は、ジャンル小説を支持しているし、だからこそ、その要素を自作に取り入れている。したがって、ジャンルに対する敵対者であるかのように非難されるのはきわめて心外—というわけだ」と指摘した上で、今回のノーベル文学賞受賞によって、イシグロの立場が擁護されたとみなしている。(136-37)一つのジャンルに縛られず、それぞれの多様性を生かしながら自らの声を届けるという手法は、イシグロの作家としての力量の大きさを示していると言える。

### 3 深淵

カズオ・イシグロがノーベル文学賞を受賞するにあたり、スウェーデン・アカデミーはその選考理由として「感情に強く訴える作品群を通して、世界と繋がっているという我々人間の幻想に潜む暗い深淵を暴いた作家であるからだ」

("who, in novels of great emotional force, has uncovered the abyss beneath our illusory sense of connection with the world")と述べている。<sup>3</sup>その深淵がどのようなところに見られるかを考察して、本論考の結びとしたい。

イシグロは、『わたしを離さないで』について、大野和基とのインタビューの中で、ヘールシャム(Hailsham)という場所を設定したことについて次のように述べている。

私はこの世界を子供時代のメタファーにしたかったのです。つまり、中にいる人は、外界が十分理解できないということです。子供が生きている、言うならばバブル（気泡）の中に流れ込む情報を、大人たちがかなり慎重にコントロールできる場所です。我々は、もちろんいろいろな点からみても、このような施設の中で成長するわけではありませんが、大人の中で生きていても、子供時代というのは、こういうものだと思います。精神的な面からみると、子供というのは言わばこのようなバブルの中に入れられて、それはまったく正しいことなのです。子供を人生の厳しい現実から守るためです。成長するにつれて自分たちを待ち受けていることについて情報を拾い集め、子供同士でいろいろ話し合うのです。ですからある意味で、物理的に外界から分けられているこのような施設を設定することで私は、子供時代がどういうものであるかを象徴させたかったのです。読者は（子供の気持ちになり）外で何が起きているのか、と想像するでしょう。それで、ヘールシャムという場所を作ることに関心を持ったのです。(134)

このイシグロの意図は、クローンたちの寄宿学校で教師を務めるルーシー先生(Miss Lucy)とクローンである生徒たちとのやりとりに表れている。クローンたちが自らの運命を知ることなく、将来



は映画俳優になりたいなど夢を語っているときに、ルーシー先生は生徒たちに次のように言う。

「悪気がないことはわかっています。でも、この種のいいかげんな話が横行しすぎていて、私の耳にもよく入ってきます。なのに誰も止めようとしません。それはいいことではありません。」(中略)「ほかに言う人がいないのなら、あえてわたしが言いましょう。あなた方は教わっているようで、実は教わっていません。それが問題です。」(126-27)

“I know you don’t mean any harm. But there’s just too much talk like this. I hear it all the time, it’s been allowed to go on, and it’s not right.” . . . “If no one else will talk to you,” she continued, “then I will. The problem, as I see it, is that you’ve been told and not told, . . .” (79)

ルーシー先生はクローンたちに真実を言わなければという思いを持っている。しかし、学校の方針との対立で結局は学校を去ることになる。言うか言わないかを、イシグロが言うように、大人たちがコントロールしている。全ての情報を知らない中で、クローンたちは自らの立場を受け入れるしかないのである。

いつどのタイミングで、何をどのように子供たちに教えるかは、教師だけでなく親にとっても問題である。このテーマはすでに『充たされざる者』の中でも扱われている。ライダーは彼の息子ボリス(Boris)とともに、かつて住んでいたアパートに、ボリスが大切にしていたのになくしてしまったサッカーのゲームの人形を取りに行くため、ちょっとした路線バスの旅をしている。この場面は、そもそも見つかるはずのないものを見つけに行くというものであるが、仕事でそばにいてやることのできないライダーにとって、思い出として唯一記憶に残

るかもしれないひとときとなっている。かなり手間取りながら最終的にライダーとボリスは目的の部屋と思われるところへ到着する。ライダーは何も思い出さなかったが、ついには、そこがかつて両親と一緒に数ヶ月住んでいたマンチェスターの家にそっくりなの分かる。そこへ近所の男が通りかかる。そして、その男が、前にそこに住んでいた家族は夫婦仲が悪くけんかが絶えなかったことを語る。ライダーは「いま息子と一緒になの分からないんですか?これはあの子の前で持ち出すような話でしょうか」(“Can you see I have my boy with me? Is this the sort of talk to come out with in front of him?”)と言うが、その男は「だけど、もうそんなに幼くはないじゃないか?すべてのことから守ってやるなんて不可能だよ」(379) (“But he’s not so young, is he? You can’t protect him from everything.” (215))と答える。そして、夫の酒癖の悪さや、夜に聞こえてくる喧嘩の話などを続ける。ライダーはさらにその話をやめるように言うが、またさらにその話が続く。ライダーは怒って、ボリスを連れて立ち去るのだが、そのとき男が「あんたは負け戦をしてるんだ!その子は現実を知らなきゃいけない!それが人生なんだぞ!どこに悪いことがある!それが現実の人生ってもんだ!」(382) (“You are fighting a losing battle! He has to find out what it’s like! It’s just life! There’s nothing wrong with it! It’s just real life!” (216))と怒鳴る。結局、事実を知らないということは暗闇の深さを知らないということになるが、逆に知ってしまうと、そこには不安や恐怖や怒りという深淵が待っていることも知ることになる。

この『充たされざる者』には後の作品にもテーマとして扱われる要素がたくさん詰まっている。夫婦間の関係悪化というテーマは、原因は様々だが、この作品の中では、ライダーの両親、ライダーとゾフィーの関係、ホフマン夫妻、プロツキー夫妻全ての夫婦に見られる。また、『わたしたちが孤児だったころ』ではバンクスの父と母の関係、

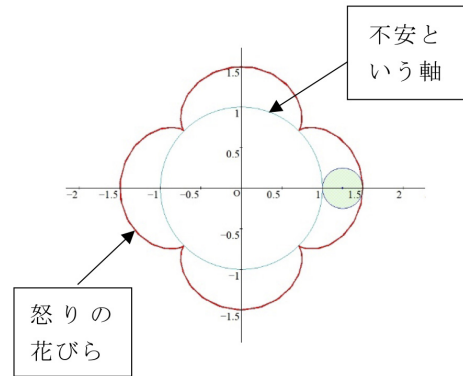
『夜想曲集』では、第1話から第3話まで、何らかの形で扱われている。

さらに、親子間の対立も『充たされざる者』の主要なテーマの一つとなっている。グスタフとその娘ゾフィー（Sophie）とは直接、会話をせず、いつもボリスを伝令のように使っている。物語の終盤で、グスタフが臨終の間際にあっても、直接、対話することはない。ライダーについても、ボリスへ声をかけた方がよい場面で会話する機会を自ら潰すということを繰り返し、これも物語の終盤で、親子関係は破綻に等しい状態となっている。

これらの対立の根底にあるのは、不安と怒りという闇である。『充たされざる者』の第1部第6章で、ホフマンの息子であるシュテファン（Stephan）が、両親の前でピアノを演奏したときの思い出を語る場面がある。演奏を始めると音楽の鑑賞力の高い母が機嫌を損ねてしまう。これは、シュテファンが極度に恐れている事態であった。シュテファンの母は詳細を語らないが、シュテファンも、そして、父のホフマンも彼女が息子に才能がないと判断したと解釈して過剰に反応している。直接議論したわけでもないのに、このような思い込みが、シュテファンと母との関係に影を落としている。

なお、そのときに演奏した曲がマレリー（Mullery）の『エピサイクロイド』（*Epicycloid*）である。おそらく架空の作家で、架空の曲であるが、この曲名は象徴的である。この作品を翻訳した古賀林幸は訳者あとがきの中で、「これは語り手の不安や自責の念が引き寄せた現実なのか、それともそれらが投影された夢なのか？（中略）混乱した社会は先が見えず、歩けど歩けど目的地にたどりつけないこの時代の不安と閉塞感（それを示唆するかのように建物の多くは円形、物語は循環的だ）を象徴的にとらえたメタファーなのか？」と語っている。（944）このことを踏まえると、作品中に登場する、現代音楽と思われる、架空の作曲家による架空の曲のタイトルにも意味がある

ように思われる。エピサイクロイドとは、定円に外接しながら円が滑らずに回転するときの円周上の定点の軌跡のことである。下のグラフは中心となる定円が半径1、その外周を回る円の半径はその4分の1の場合の軌跡である。外周を回る円



の大きさが変わると、描かれる軌跡も変化するが、いずれにしても美しい図形が描かれる。

しかし、この作品では、中心となる円は不安という軸であり、その周りに描かれた花びらのような軌跡は怒りが強まり、頂点に達しては収束することを繰り返し、結局は元に戻っていく様子を描いたものと捉えることもできる。古賀林の指摘にもあるように、円形の建物や循環的な物語構造に加えて、曲のタイトルまでもが円形かつ循環的なのは偶然ではないように思われる。

心理学者の山根一郎は怒りという感情について、次のように述べている。

感情には「蓄積性」という性質を仮定できる。蓄積性とは、時間を経過して存在し、時を異にする同じ感情が結合する性質をさす。（中略）

ただし蓄積性の能力は個々の感情によって異なる。たとえば、驚きはまったく蓄積できない（むしろ二度目には驚かなくなる）。それに対して、愛情・嫌悪は蓄積しやすく、怒りもまた蓄積しやすい。

感情は蓄積によって深層化もされる。深層

化とは、現在的・自覚的に体験していない状態になることで、感情は持続しているが表出も表象もされていない状態になる。それゆえに、爆発する怒りは、その場での怒りではなく、過去からため込んだ怒りを伴っている場合がある。その場合、その場においては不自然に強すぎる怒りとなる。(79)

『充たされざる者』の最後において、物事がとごとくうまくいかず、壊滅的な結末を迎えるところ、例えば、プロツキーの行き過ぎた解釈に基づく指揮とそれに対する楽団員たちと聴衆たちの怒り、「木曜の夕べ」は失敗し、妻との関係も最悪の状態となったホフマンの怒り、ライダーのゾフィーやボリスに対する理不尽なまでの怒り、ゾフィーのグスタフに対する怒りなど、他にも様々な怒りが渦巻きながら物語が終わるところは、山根の言う、そこへ至るまでの怒りの蓄積が招いた結果と言える。そして怒りが深層化されることにより、互いの人間関係、それも集団としては最小単位であり、最も緊密な関係であるはずの家族の間にも、修復不能なまでの深淵と断絶が横たわるのである。

ユートピア小説またはディストピア小説とされた作品、例えばジョージ・オーウェル (George Orwell) の『1984年』(Nineteen Eighty-Four, 1949) では、政治的な力が個人間の団結を阻害している。しかし、『充たされざる者』には、政治的な力によらずとも、阻害され孤立してゆく人々の姿が描かれている。そして、その阻害要因は怒りの感情という、個人の心のブラックホールなのである。さらに、ユートピア小説では、現実世界の政治に対する批判が含まれていることが多いのだが、テオが指摘するように、イシグロの作品で、直接的にそのような批判を加えているところはほとんどない。(124) この意味では、国家と個人の間を描いた従来のユートピア作家とは全く異なっている。

先に述べたとおり、この作品では、全体の構成を考える上で、音楽も重要な役割を果たしている。ライダーが「木曜の夕べ」で演奏する曲を、悩んだ挙げ句にマレリーの『石綿と繊維』(*Asbestos and Fibre*) にする。なかなか落ち着いて練習できる場所にたどり着けないが、何とかたどり着いた小屋のアップライトピアノで練習することになる。ライダーが作品中で、グランドピアノで演奏することは一度もなく、ピアノを弾くのも、この第3部に描かれた練習の場面のみである。しかも、練習の間、小屋の外では、プロツキーが死んだ彼の犬を埋葬するための穴を掘っている。ライダーは、「第3楽章の崇高なメランコリー」(632) (“the sublime melancholy of the third movement” (357)) に入ろうとしたとき、その墓掘りの音に気づいている。ライダーは第3楽章を弾き終えてしまうが、「最終楽章は弾かないことにして—それはこの儀式にとうていふさわしくない—第3楽章を繰り返すことにした」(638) (“... decided I would forget the final movement—it was hardly suitable for the proceedings and simply recommence the third once more” (361)) のである。ここには、4楽章構成のピアノ・ソナタと思われるこの曲の第4楽章が、メランコリックでスローなテンポの第3楽章とは違って、激しいものとなることが匂わされている。そもそも『充たされざる者』は4部構成を取っているが、これを一曲の音楽と捉えるならば、ライダーが選択した『石綿と繊維』と重なるものがあり、『充たされざる者』の第4部も激しいものとなることが想起される。したがって、上の引用文で訳出はされていないが、原文では、ライダーがこの第4楽章を意図的に忘れようとしているところも重要になってくるのである。

さらに、違った角度から『石綿と繊維』というタイトルを検討すると、物語とは何の脈絡もなさそうに見えるこのタイトルにも、別の文脈を読み取ることができる。石綿はかつて奇跡の鉱物とされて、



建設資材や絶縁素材として幅広く使用されてきたが、肺癌や中皮腫にもなることから、静かな時限爆弾とも呼ばれるようになった。つまりこの曲名には死のイメージが含まれていると見ることができ、ブロッキーの犬の弔いの場面で演奏されているのは象徴的である。この死のイメージは第4部のグスタフの死にもつながっているように思われる。ここに見てきたことから、深淵という闇は死を意味していると捉えることも可能である。

イシグロは慶應義塾大学でのオープン・インタビューの中で、個人がどのように自分の過去と戦い、どのように自分の過去に何かを埋めてきたかについて、また、個人にはすべてのことを記憶し、正直でありたいと願うために、もがいているということを書いたと述べている。これは主として『充たされざる者』に始まる中期の作品群を指すと思われる。また、彼は、今は複数の人で構成された共同体、民族、国家がいかにして同じプロセスをたどってきたかを扱う小説を書きたかったと述べている。(161) これは『忘れられた巨人』を指しているが、いずれにしても、彼の作品に共通することとして、記憶として蓄積されているのは、不安、いらだち、怒りである。したがって、怒りとそれに関する言葉が作品中に何度登場し、それぞれの言葉がそれぞれの場面でどの程度の怒りの強さを持っているのかを分析することで、記憶と忘却の性質や横たわる深淵の本質にも迫ることができるのではないと思われる。ノーベル賞を受賞したことで、一気に注目度が上昇したが、イシグロの今後の作品に期待していきたい。

## 【注】

- 1 本論考は、平成30年1月27日に松山大学で行われた、松山大学大学院言語コミュニケーション研究科・愛媛日英協会合同主催の「ノーベル文学賞受賞記念公開シンポジウム『カズオ・イシグロの世界』」において、パネリストとして研究発表をした際の原稿に加筆したもの

である。

- 2 これ以降、イシグロの作品からの引用については、英文、邦訳とも、引用・参考文献の作品に掲げたものの該当ページのみを記して示す。
- 3 [https://www.nobelprize.org/nobel\\_prizes/literature/laureates/2017/](https://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/laureates/2017/) より。

## 【引用・参考文献】

カズオ・イシグロの作品（入手しやすいものを挙げる。引用は全て下記のテキストを使用した。）

### *A Pale View of Hills.*

London: Faber and Faber, 1982.

『遠い山なみの光』（小野寺健訳）

ハヤカワ epi 文庫、2001 年。

### *An Artist of the Floating World.*

London: Faber and Faber, 1986.

『浮世の画家』（飛田茂雄訳）

ハヤカワ epi 文庫、2006 年。

### *The Remains of the Day.*

London: Faber and Faber, 1989.

『日の名残り』（土屋政雄訳）

ハヤカワ epi 文庫、2001 年。

### *The Unconsoled.*

London: Faber and Faber, 1995.

『充たされざる者』（古賀林幸訳）

ハヤカワ epi 文庫、2007 年。

### *When We Were Orphans.*

London: Faber and Faber, 2000.

『わたしたちが孤児だったころ』

ハヤカワ epi 文庫、2006 年。

### *Never Let Me Go.*

London: Faber and Faber, 2005.

『わたしを離さないで』（土屋政雄訳）

ハヤカワ epi 文庫、2008 年。

### *Nocturnes: Five Stories of Music and Nightfall.*

London: Faber and Faber, 2009.

『夜想曲集—音楽と夕暮れをめぐる五つの物語』

（土屋政雄訳）ハヤカワ epi 文庫、2011 年。

### *The Buried Giant.*

London: Faber and Faber, 2015.  
『忘れられた巨人』（土屋政雄訳）  
ハヤカワ epi 文庫、2017 年。  
***My Twentieth Century Evening and Other  
Small Breakthroughs: the Nobel Lecture.***  
London: Faber and Faber, 2017.  
『特急二十世紀の夜と、いくつかの小さなブレー  
クスルー：ノーベル文学賞受賞記念講演』  
（土屋政雄訳）早川書房、2018 年。

#### 【論文等】

Cain, William E.  
***Literary Criticism and Cultural Theory.***  
New York: Routledge, 2006.  
Cheng, Chu-chueh.  
***The Margin Without Centre.***  
Bern: Peter Lang AG,  
International Academic Publishers, 2010.  
Drağ, Wojciech.  
***Revisiting Loss: Memory, Trauma and  
Nostalgia in the Novels of Kazuo Ishiguro.***  
Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars  
Publishing, 2014.  
Groes, Sebastian and Barry Lewis eds.  
***Kazuo Ishiguro:  
New Critical Visions of the Novels.***  
Hampshire: Palgrave Macmillan, 2011.  
Lewis, Barry.  
***Kazuo Ishiguro.***  
Manchester: Manchester U.P., 2000.  
Matthews, Sean and Sebastian Groes eds.  
***Kazuo Ishiguro: Contemporary Critical  
Perspectives.***  
N.Y. and London: Continuum, 2009  
Shaffer, Brian W. and Cynthia F. Wong.  
***Conversations with Kazuo Ishiguro.***  
University Press of Mississippi, 2008.  
Sim, Wai-chew.  
***Kazuo Ishiguro.***  
N.Y. and London: Routledge, 2010.

Teo, Yugin.  
***Kazuo Ishiguro and Memory.***  
Hampshire: Palgrave Macmillan, 2014.  
Wong, Cynthia F. and Hülya Yildiz eds.  
***Kazuo Ishiguro in a Global Context.***  
Surrey: Ashgate, 2015.  
阿部陽子  
「『嵐が丘』—ゴシック小説の中のロマン主義  
的な要素」  
跡見学園女子大学文学部紀要第 49 号、  
2014 年、167-85 ページ。  
大野和基  
「インタビュー カズオ・イシグロ『わたしを離さ  
ないで』そして村上春樹のこと」  
『文学界』2006 年 8 月、130～146 ページ。  
大森望  
「カズオ・イシグロとジャンル小説の複雑な関係」  
『カズオ・イシグロ読本』別冊宝島編集部編、  
宝島社、2017 年、130-37 ページ。  
河内恵子（インタビュー・訳）  
「オープン・インタビュー：カズオ・イシグロ（慶  
應義塾大学文学部創設 125 周年記念事業）」  
『三田文学』、2015 年 11 月、158-93 ページ。  
柴田元幸編・訳  
『柴田元幸と 9 人の作家たち』アルク、2004 年。  
莊中孝之  
『カズオ・イシグロ—〈日本〉と〈イギリス〉の  
間から』春風社、2011 年。  
平井杏子  
『カズオ・イシグロ—境界のない世界』水声社、  
2011 年。  
山根一郎  
「怒りの現象学的心理学」  
椋山女学園大学文化情報学部紀要 5、2005  
年、71-84 ページ。

## 【会員紹介】

弁護士（愛媛弁護士会）

正 木 友 啓



はじめまして。

このたび、日英協会に入会させていただきました、正木友啓と申します。

現在は千舟町にある弁護士法人はるかという法律事務所に所属している弁護士でございます。

2015年秋～2016年秋にかけて、イギリスの大学院に1年間留学しておりました。せっかくなので帰国後もイギリスと繋がりを持ちたい、との思いから、入会させていただきました。

簡単に自己紹介をいたしますと、私自身は大阪生れの東京育ちであり、高校は開成高校（正岡子規や秋山真之が東大に入る前に短期間在籍した共立学校に由来します）、東京大学から中央大学法科大学院を出ております。父は広島・母は兵庫の出で、愛媛県にはまったく縁がありません。私の所属する法律事務所が国際案件、特に船舶に関する案件を取り扱っていることから、海に縁の深いここ愛媛県に事務所の支部を設け、私がやってきた、という次第です。

日本の弁護士業界では、弁護士になってから5年程度下働きをしてからリフレッシュを兼ねて海外に留学するケースが多く、私も例に漏れず弁護士として7年程度働いてから留学いたしました。

私が留学したのは、イングランド南部のサウサンプトンにあるサウサンプトン大学で、同大学の修士課程海事法コース（LLM Maritime Law）を修了いたしました。イギリスの法学修士は一般に秋～秋の1年で、冬・春・夏（名称は適当です）の3学期に分かれ、冬と春は授業を受けて試験に通って単位を取得し、夏に修士論文（私の大学では15000語でした）を書き上げる、という流れになります。

私の年度では、LLMの学生は100名程度（←誰にも人数が分からないのです!）、うち日本人は私1人でした。例年、日本人の数は0～2人とのことです。最大派閥はやはり中国、そしてギリシャで、この2カ国で60%程度、あとは世界各地から集結しております。イギリス人は数名で、これは修士課程を修了していることがイギリスの弁護士資格にまったく影響しないことに関係するのでしょうか。私のように弁護士資格を持っている人間は少なく、学部を出たばかりの若い方々が大多数、さらに、法律のバックグラウンドを全く持たない船長経験者も数名おられました。若い皆様に囲まれて授業を受けるというのは、なんとも新鮮なことでありました。

同大学全体では、日本人は学部・修士合わせて20名もいないのではないかと思います。慶應義塾大学や同志社大学などとは交換留学制度を設けているようで、そのような皆様を合わせると日本人はもうちょっといるような印象です。また、同大学にはかつて愛媛大学でも教鞭を執られていた鈴木達次さん（現國學院大学教授・保険法など）が在外研究で来られており、愛媛に縁のある方と異国で出会っておりました。

イギリスに留学したのは、もちろん大英帝国イギリスが海事法の世界では最も強い国であるからなのですが、裏の目的としては、私の趣味である競馬場巡りやテニス観戦などがございます。このあたりは書き出すと長くなるのでまたの機会とさせていただきます。

上にも書きましたとおり、私自身はここでは外様の異質な経歴の持ち主ではありますが、それゆえ皆様に新しいご縁を持ち込むことができるのではないかと考えております。





ホテル勝山 常務取締役  
石橋 貞人



はじめまして。この度、愛媛日英協会に入会させていただきました石橋貞人と申します。

合田理事のご紹介で、入会させていただくこととなりました。

大学卒業後、1996年から4年半程イギリスに留学しました。子供の時から大学まで、テニス部に所属し、ウインブルドンに出場することを夢に見ながら練習ばかりしていたため、ロンドンの南西部にあるウインブルドンのセンターコートを生で見たときの感動は、今でも忘れられません。毎年、6月下旬から7月上旬に行われる全英オープン開催時には、朝5時の地下鉄に乗って、テニスコート周辺の公園にできた長い列に並び、当日販売されるチケットを買いました。当時は、Tim Henmanというイギリスのテニスプレーヤーをよく応援していました。



ウインブルドン、センターコートにて

毎週日曜日は、Regents Park に行って気の合う友人とテニスをしました。また、当時は

Finchely Road 駅の近くに住んでいたのですが、近所のテニスクラブに加入し、イギリス人とテニスを通じて交流をしながら語学力を身に付けていくことができたように思います。



ペニーレーンにて

1、2年目は、語学学校と大学のファンデーションコース、3、4年目は、Thames Valley University（現 University of West London）の大学院でホスピタリティーマネジメント学科を専攻し、卒業しました。とは言え、大学院に入学してからは、語学の壁に何度もぶち当たり、とにかくもうやるしかない、と腹をくくって、毎日、朝から晩まで図書館にいたことを思い出します。

愛媛日英協会に入会させていただくことで、懐かしいイギリスでの生活を思い出しつつ、また新しい知識を深めていきたいと思っています。

また愛媛県は、まだインバウンドのお客様は少ないですが、今後、イギリス人も誘致できるように社会貢献していきたいと考えています。

これから、どうかよろしくお願い致します。

## 【追 悼】

### 梶田三郎氏、麻生俊介氏を偲んで

愛媛日英協会 事務局  
合 田 謙 司

今年1月18日に当協会名誉会長梶田三郎氏、また2月20日には元会長の麻生俊介氏が相次いでご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

梶田名誉会長は、株式会社伊予銀行頭取を務めておられました平成2年3月の愛媛日英協会設立に発起人代表として尽力されるとともに初代会長に就任され、平成17年5月まで約15年間に亘って愛媛における日英両国間の文化、学術、経済等の相互理解や交流を深める活動の推進に努められました。

また、麻生元会長は、梶田初代会長の後を引き継がれ、平成25年6月までの8年間、当協会の活動にご尽力いただきました。特に平成23年に実施した創立20周年記念事業においては、駐日英国大使デイビッド・ウォレン氏をお招きし、講演会、懇親会を盛大に開催されたことは、記憶に残り印象深いところです。

個人的な思い出になりますが、梶田名誉会長とはロンドン勤務時代に2度一緒に行動させていただいたことがありました。最初は松山市の欧州視察ミッションの団長として英国に来られたのですが、週末の休日にもかかわらず、丁度その頃ロンドンから150kmほど離れたSwindonという街で行われていた当時世界で初めての電子マネーの社会実験を視察され、それに同行させていただきました。

当時すでに70歳は越えておられたと思いますが、非常にご興味を持たれて精力的に視察されるとともに、同行している私にも細やかな心遣いをいただいたのでした。

また、麻生元会長も業界団体の役員視察でロンドンに来られました。メンバー全体でのスケジュールが綿密に組まれておりましたので、私が一緒に行動させていただく機会はなかったのですが、それでも滞在中に時間を見つけてご連絡をくださり、ロンドン市内でお話しさせていただくことができました。その際、ホテルへお送りするタクシーがリージェントストリートを走っているとき、麻生元会長が突然タクシーの窓を開けて通りに向かって大声で「おい」と声を掛けられました。道路の向こう側をお取引先の方が歩かれていたのです。しばらくタクシーの内と外で話されて別れましたが、遠く離れたロンドンでお取引先の方を目敏く見つけられ、親しくお話しされるなど、気さくさと人間関係のグローバルさに大いに驚かされました。

お二方とも地域金融機関の経営者として多忙を極める日々の中で愛媛日英協会の活動に対しても真摯に取り組んでくださいました。経営の最前線では業務において非常に厳しいお二人であったと聞いておりますが、私が親しくお話しさせていただいた時期は、愛媛県など地域全体に対して大所高所からの助言やご指導をされる立場でしたので、愛媛日英協会では、厳しくも優しくご指導いただきました。お二人の笑顔が今でも目に浮かびます。

ここに改めて、梶田三郎様と麻生俊介様に対しまして、これまでの愛媛日英協会へのご指導、ご支援に感謝申し上げますとともにお二方のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

これまでたいへんお世話になりました。

どうぞ安らかに休息ください。

## 【事務局報告】

### 愛媛日英協会 平成29年度活動報告

愛媛日英協会では、日英両国の親睦と理解を図り、両国の学術、文化、経済等の交流に寄与することを目的として活動していますが、平成29年度には、以下の活動を実施いたしました。

#### 1. 年次総会

- (1) 開催日：平成29年6月1日（木） 17:00～17:30
- (2) 会 場：東京第一ホテル松山 2階 コスモ・シルバー
- (3) 議 事：第1号議案 平成28年度事業報告について  
第2号議案 平成28年度決算報告について  
第3号議案 平成29年度事業計画（案）について  
第4号議案 平成29年度収支予算（案）について  
第5号議案 理事の退任及び後任理事委嘱（案）について
- (4) 報 告：新規入会会員、会員の状況について
- (5) 参加者：47名

#### 2. 理事会等

##### (1) 理事会

- 【開催日】平成29年5月19日（木） 11:00～12:00
- 【会 場】株式会社伊予銀行 第2応接室
- 【議 事】第1号議案 平成28年度活動報告について  
第2号議案 平成28年度決算報告について  
第3号議案 平成29年度活動計画（案）について  
第4号議案 平成29年度収支予算（案）について  
第5号議案 新規入会会員の承認について  
第6号議案 理事の退任及び後任理事委嘱（案）について
- 【参加者】理事7名（理事総数9名）

##### (2) ロンドン愛媛県人会との理事交流会

- 【開催日】平成29年8月23日（木） 18:00～20:30
- 【会 場】株式会社伊予銀行 松山保養所
- 【参加者】ロンドン愛媛県人会 代表 井関武彦氏  
当協会 理事7名（理事総数9名）

#### 3. 講演会・懇親会

- (1) 平成29年6月1日（木） 17:30～18:30 （年次総会講演会）  
【テーマ】『英国のEU離脱の行方とその影響』



【講 師】愛媛大学 名誉教授 戸澤健次氏

国立民族博物館 客員研究員 Ms.Hannah Eastham (ハナ・イーストハム)

【会 場】東京第一ホテル松山 2 階 コスモ・シルバー

【参加者】53 名

(2) 平成 29 年 11 月 18 日 (土) 13:30 ~ 16:30

【テーマ】『ビートルズで味わうイギリス文化 Part II』

【講 師】愛媛大学 学長 大橋裕一氏

中小企業基盤整備機構 四国本部 松山オフィス 伊藤豊氏

愛媛銀行 国材部 部長 山下雅之氏

【会 場】愛媛大学 レストランhaco 愛大城北店

(懇親会) 松山大学 樋又キャンパス 1 階 レストラン “ル・ルパ”

【参加者】(講演会) 47 名、(懇親会) 44 名

(3) 平成 30 年 1 月 27 日 (土) 13:30 ~ 17:00

【テーマ】『ノーベル文学賞受賞記念 公開シンポジウム〜カズオ・イシグロの世界〜』

【パネリスト】松山大学大学院 言語コミュニケーション研究科 教授 新井英夫氏

松山大学 名誉教授 岡山勇一氏

愛媛県立中央高等学校 教諭 鷺野博文氏

【共 催】松山大学大学院 言語コミュニケーション研究科

【会 場】(講演会) 松山大学 樋又キャンパス 2 階 H2A 教室

(懇親会) 松山大学 樋又キャンパス 1 階 レストラン “ル・ルパ”

【参加者】(シンポジウム) 約 150 名、(懇親会) 45 名

## 5. 「日英協会会報」(第 39 号) の編集、発行

(1) 掲載記事:【巻頭言】、【随想】、【英国研究】、【英国便り】、【書評】、【映画評】、

【会員紹介】、【事務局からのお知らせ】等

(2) 発行部数:200 部

(3) 発 行 日:平成 30 年 4 月

【愛媛日英協会 事務局 合田】

(表紙題字 榊田三郎名誉会長書)

－ 愛媛日英協会 事務局 －

〒790-8514 松山市南堀端1

株式会社伊予銀行 国際部内

Tel: 089-941-1141 Fax: 089-946-9101